
物語の中の銀の髪

憑依

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

物語の中の銀の髪

【Zコード】

N6778X

【作者名】

憑依

【あらすじ】

「マジック・テイル」最新のVRヴァーチャルリアリティを使つたMMORPGである。

「マジック・テイル」を テストの頃からやりつづけている主人公が「マジック・テイル」の100年後の世界に！？ 「マジック・テイル」のアバターであつたレイという女性キャラクターになつた男の娘の冒険の話

第0話 男の娘とかプロローグとか説明とか（前書き）

これは初投稿の作品です。 文字が抜けたり、表現がおかしかったり、投稿がおそくなってしまつたりするかもしれません。 それでも見ていただけたら幸いです。

第0話 男の娘とかプロローグとか説明とか

ふと目を開けると光が溢れていた。

「あれ？」

ふと疑問に思った。おかしい、俺は今日、休田だというのでMORPG「マジック・テイル」をやり深夜2時頃に寝たはずだ。

この「マジック・テイル」は4年前に登場した剣と魔法のRPGである。だが米国の軍隊に使われたVR^{ヴァーチャルリアリティ}というのを使いあたかも本当にゲームの中にはいるような気分にするらしいその新機能を使つた事により評判を呼びいまじや日本最大のMMORPGとなつた俺は「マジック・テイル」のテストの頃からやつている。今じゃ俺は最古参といつてもいい廃プレイヤーである。

とりあえず起きて現状を確認しようと起き上がつた。周りは富士の樹海・・・というよりモン^{モン}のフィールド出てきそうな森が広がつていた。

「……なにこい？」

そう呟いたところでふとおかしい事に気がついた。

声が高い普通の俺も男の中では声が高い方だがこの声は鈴が鳴つたような声で呟いた。

よく見れば自分の服装や体もおかしい。着ている服はそのまんまワンピース。そして男なら普通持つていらない大きな一つの膨らみが・・・

「はい！？」

胸があるー？ 顔が女らしいと言われ続けた俺が少しでも男らしくなるようと筋トレを続けていたのに筋肉の代わりに脂肪の塊に！？ これでは本当に女だと言われてしまう！

慌てて自分の胸以外の体を触りまくる。男らしいがつしりした腕が柔らかくなっている！ 足も細くほつそりとして真っ白くなっている……俺の日焼けしまくりの男らしい足が……すね毛は元々なかつたけど。

そして髪は腰まであり、サラサラした銀髪。

完璧に女になってしまっている。それ以外には耳がなぜか細長くなっている……ん？ 細長い耳、腰まで届く銀髪、そしてどちらかと言えば大きめの胸……この姿まだ顔は見ていないがどこかで知っているような気がする……とりあえず男らしくなろうとしていたが何故か女になつていてる自分の体にテンションが下がりつつもこの樹海のような場所から出ようと思った……流石にこんなところに人はいないだろうしな。

俺の名前は、白崎 陸高校2年生16歳いまさら自己紹介してもやや遅い氣がするがしておこう。俺は生まれつき顔が女らしかった。そのせいで男子にはからかわれ続け女子に「かわいい」なんて言われてしまうような男だ。ちなみに中学の頃の部活は家庭科調理部に入っていたおかげで男子よりも女子のほうが友達が多いという状態になっていた。なに？ 羨ましい？ ふざけるな！ 修学旅行の部屋割りで男子から「そりゃあ白崎って、男子だったな。」とか言わ

れて三日間落ち込んだ事もある俺に謝れ！

「こんな嫌な記憶を俺は誰に説明してるんだ？テンショーンが落ちてるせいで何かとナーバスになっているのかもしない……」

周りから黒いオーラが出てるかもしないなーっと思いつつゆっくりと歩くと湖が見えてきた。周囲には木々がないから時々人が来てるのかもしない。

「お、ここなう。」

湖に近寄つて湖面に顔を近づける。湖に映つた自分の顔は感嘆と驚愕と予想していた事が当たつてしまいなんかひどい顔になつていた……ここまでひどい顔は好きな女の子に告白したら「私、男の子が好きだから……あ、陸君は男の子か。」といわれたとき以来かもしれない。とりあえずため息をついた。湖に映つた顔は、優しさと冷静さを併せ持つた、笑顔が似合いそうな少女の顔をしていたが、目は水色に近い色をしていて、長い銀髪と普通の人間には見えない細長い耳。俺は、つい湖の中の少女の前でボソリと呟いた。

「やっぱレイになつてる。」

まあ、レイっていうのは「マジック・テイル」での俺のアバターだ。

中学二年生の時、数少ない男友達に誘われ テストを行つた。

正直M M O R P Gは初めてだつたが。とことんハマつた。その時に作ったアバターがレイである姿は湖に映つた自分と全く同じ姿でエルフの女性に設定した。何故女性にしたのか？……まああの頃は精神的に鬱でこんなに女らしいなら女で生まれてくれればよかつたのに……とか思つていたからせめてゲームでは女でいようと思つていたのだ。

「……ネエ、ネエッテバ。」

「ん?」

湖の水を飲みつつこれからどうじようかと考えていると何か声の
ような者が聞こえる。周りを見渡すが誰もいない。

「……ナニシテルノ? アア、ザンネンダケドミエナイヨ?」
「え? ああ、精靈か。」

精靈……まあ簡単に言うと大地のエネルギーの塊のようなものだ
と「マジック・テイル」の公式HPには書いてあった。エルフ系
の種族専用のスキルで「対話」というのがあり、精靈の多い場所（
森など）にいると精靈と会話する事によつて遠くにいる魔物やプレ
イヤーの場所がわかるというスキルがある。たぶん精靈が自分を
エルフ系だと分かつて話しているのだろう。

「何か用かしら?」

こつもの俺はこんな喋り方をしないが。この体がレイであると分
かるとつこつい「マジック・テイル」の時の喋り方になつてしまつ。

「アナタハイセカイカラキタ? チガウ?」

「え? なんで知ってるの?」

「ダツテワタシタチガヨンダカラダヨ?」

「あなた達が呼んだつて……私を? 後なんでこんな姿?」

なぜレイの姿なんだろう?……まあ実はうれしいが。

「ソレハ、コツチノカラダノホウガツクリヤスクテセツメイシヤス

イカラ。」

「説明しやすい?」

精霊の話によると、俺の元居た世界にあったMMORPG「マジック・テイル」はこっちの世界の100年前の姿、形、魔法、国、政治の状態などがそつくりだつたらしい。その影響かどうかは分からないらしいが世界どうしが惹かれ合つてぶつかる寸前にまでなつていたらしいが神様達ががんばつて少し遠ざけたらしい。

「もしごぶつかつたら?」

「フタツノセカイガブツカルト、ブンメイガマザツテタイヘンナコトニナツテタ。」

のどかな草原にいきなりビルが建つたりしていたかも知れないそうだ……

「アンシンシタノモツカノマ……コノセカイニマオウガデテクルカモシレナイノ……」

「魔王?世界征服でもしてくるの?」

「ウン……」

最近隣の大陸闇の力を使い、大陸統一をし、「魔神」と言われている人がいるらしい。そしてその「魔神」がさらなる土地を探しているらしい。まだこの大陸は見つかっていないが時間の問題らしい。闇の力は、木々を枯らせ水を黒くし、空は太陽が見えなくなる程暗雲が覆うらしい。そうなれば精霊はみんな消えてしまうらしい。だが「魔神」に対抗できる人はこの世界にはいない。

100年前にあつた戦争でMMORPG「マジック・テイル」では当たり前だった魔法やスキルは今の人々は使えないらしい。そこで、精霊達は神々と交渉して遠ざけていた俺の居た世界の「マジック

ク・テイル」をしていた人達から一人選んで、こっちの世界に連れてきたという事らしい。さらに神様が「マジック・テイル」の装備、魔法、スキル、姿などはこっちで作つた方が色々と楽だからという理由で魂だけを持ってきたらしい。

「何で、私が選ばれたんですか？」

「セイレイトカイワガデキルエルフデ、イチバンシヨイカラダヨ」「……ああそういうこと。」

精靈と会話が出来るのはエルフ系の種族のみ、さらにエルフ種で一番強い俺が指名されたらしい……

「マジック・テイル」には種族と職業がある。種族というのはヒューマン、エルフ、ドワーフなど様々な種族があるが、英雄度を使うと上位種になれたりする。ちなみにギルドの依頼を解決したり、国に貢献したりすると英雄度がもらえる。たとえば、エルフの上位種にはホーリイエルフ、ダークエルフ、さらにその上位種にハイエルフがある。ホーリイエルフ、ダークエルフは英雄度を使うだけでなれるが、ハイエルフはエルフ系の種族がなれる上位職全てをカンストのレベル500にしなければいけないという。

職業は、剣士、魔法使い、僧侶、狩人、格闘家などがある。職業はレベル一定まで上げたり上位種でなければいけないなどの条件がある。さらに面倒くさいのがホーリイエルフ、でしかなれない職業やダークエルフでしかなれない職業があつたりする。ちなみに転職は魔法使いから剣士になるということもできるがレベルは1になる。だがまた魔法使いになると魔法使いだった頃のレベルになる。つまりハイエルフになると英雄度を使いホーリイエルフになり、上位職をレベル500まで上げ、さらにダークエルフになるために英雄度を使いダークエルフでしかなれない上位職になると

いう行程が必要になる。だがこの行程が済むとエルフの最上級職のエルフマスターになれるようになる（エルフマスターになつたらまたレベル1からレベル上げになるのだが……）。エルフマスターになると元々上位職で手に入れたスキルを全て使え、エルフが着れる装備全て装備できる。このエルフマスターになった（さらにエルフマスターのレベル500）のは俺だけである。ちなみにたつた4年間でエルフマスターになれたのには理由があるが後々説明しようと思う。

「じゃあ、今の私はハイエルフでエルフマスターでレベル500で全ての装備を持っているってこと！？」

「ウン、ソウダヨ？ カミサマがヨウイシテクレタヨ。」

俺の4年間が意外な形で有効活用されたのであった……

第1話 魔法とか初実践とか少女とか

「そういうえば、魔法も、使えるのよね。」

「ソリヤモチロン。アナタノイウ「レイ」トカイウヒトヲモトニシテルカラネ。ツカツテミルノ?」

「え?まあ、やりかた教えてくれる?」

「ウン! イイヨ。」

湖のすぐ側で足を伸ばして座りながら精霊と喋っている俺。傍から見ると独り言を言つてゐるようには見えないか心配だが魔法は打つてみたいのでそんな周囲の事は心配しない。周りに人はいないしね。

スキルには、何種類がある。火の玉で敵を攻撃したり仲間を回復したりする【魔法】。暗いダンジョンで明かりを灯したり、水の上を歩いたりする【補助】。モンスターを召喚して速く移動したり戦闘を一緒にしたりする【召喚】。武器やアイテムを作る【制作】。居合い切りなどの【魔法】と似ている【奥義】の5種類がある。精霊によると魔法は最初に魔力を集中させると魔法が発動するらしい。多分魔力とはMPの事だろ?。そう思えば「マジック・テイル」の時と大して変わらない。俺は、精霊に色々助言を受けながらも魔法を発動させる。

「ハアッ!」

「ワオッ! スゴイ!」

今つかつたのは【魔法 アタッカー】である。【魔法 アタッカー】とは自分のパーティメンバーの攻撃力を上げる魔法だ。フアイア等の攻撃魔法を使ってみたい気はするが、精霊が「ワタシノイバショヲコワサナイデ!」と言つてきたのでステータス変更の魔

法を使つていた。自分の体がほのかに暖かくなつてゐる気がする。無事成功したようだ。

「そういえば、私の持つていた装備とかつて……この聖女のワソピースだけ？」

「ウウン……タシカカミサマガ【ホジヨ】ニアイテムボックスガダセルツティツテタツケ？」

「【ホジヨ】？……ああ【補助】ね。」

精靈がカタコトで喋つてゐるせいとちょっとわかりづらくな……。

とりあえず魔力を集中させ【補助 アイテムボックス】を念じる。目の前にいかにもRPGでありそうな宝箱が出てくる。……魔法が便利すぎて困るな。宝箱を開けて中を見てみると、真っ黒で底が無さそうである。どうやつたら防具とか出てくるのだろうか。

精靈に聞いても「サア？」だそうだ。それぐらい教えてくれよ神様、俺はエルフマスターになるのにどれほど装備を集めたか……

「マジック・テイル」の装備には全てランクがある。一番低いのがEランク、その次にD、C、B、Aと続き最上級にSランクがある。俺の今着ている聖女のワンピースはSランクである。防御力は他のSランク装備に比べると低めだが、装備の見た目とMP消費20%カットというスキルの便利さで主に俺が気に入っている装備である。それ以外にも俺は、破魔の弓などのSランク装備をいくつか持つっていたんだが……などと悩んでいるとアイテムボックスの中にいつのまにか金の装飾のされた弓、破魔の弓と矢筒が置いてある。破魔の弓と矢筒を出しながらしげしげと眺める。うん本物だ。オリハルコンで作られた白と金の美しい弓。光属性付の弓系の最強装備である。

「イキナリユミガデテキタ！」

「うん……すいー！」

これは本当にすごい、流石魔法！ なんでもありだな！

とりあえず一通り確認出来たためそろそろ旅に出たいと精靈に伝えると丁寧に近くの町を教えてくれた。 ちなみにアイテムボックスは消えろと念じるとスッとまるで幻のように消えてくれた。 本当に便利すぎて言葉が出ない……。 この後、しばらく森の中をさまよいつつも外に出た。 森の外は草原が広がっていた。 草は自分の腰ぐらいまで伸びている。 正直邪魔だと思いつつ俺は、草を払いながらすすむ。 とりあえず今の心配は寝るところが見つかることかうかだその後に「魔神」のことは考えよ。 「マジック・テイル」には大陸が一つしかなかった。 もしかしたら「魔神」は俺が知らない種族かもしれないし、魔法だつて未知のものがあるかもしれない。 正直さっぱりどうすればいいか分からぬ。 ならせめて今世界の事を知つておく必要があるだろう。 …… よくよく考えればモンスターの出てくる場所で他人から見れば「は持つていて」が、ワンピース一つ、素足の少女が歩いている……うん、かなり非常識だ。「靴も履けばよかつたかな？」 何て呟いていると男の怒声が聞こえる。

「オラアー！」 今まで逃げてるんだよおー。 セイセイと積み荷を降ろせえ！

「もう逃げられないよつ？ おじさん？ 諦めたらあ？」

すこし近づくと馬車に乗つていてる太った商人らしき人が7人のいかにも盗賊やつてますつて感じの人達に囲まれている。 あたかも近くにいるような説明をしているが、今は大体200m位の所で眺めている。 【補助 ホーグアイ】という職業 狩人のスキルで見

ているこれをつかいながら弓を使ってモンスターに気づかれる前に倒すという事もできる。……「うーん、盗賊も人だし弓を向けるのは申し訳ないとは思うが、ゆっくりと腰を低くし草に隠れて進む……」

盗賊と商人がまだ言い合っている……意外と盗賊は良心的かもしれない。盗賊と商人との距離は大体100mぐらいにまで近づいた。ここから当たつたら普通は奇跡に近い。だが俺はハイエルフでエルフマスターでレベル500の魔界プレイヤーだのぐらいい遠くからモンスターに当たられるか一人でやって350mから当てたこともあるここなら十分すぎる。静かに弓を引く。狙うは一番商人の近くにいる金棒を持つ無駄に筋肉ムキムキの大男。出来ればうまく脅したいので商人を殴ろうとしたところを金棒に打ちたい。え? 何格好つけてんだって? いいじゃん! ちょっとロマンじやん!

「もううひゅせえ! さうさとよこしゃがれ!」

「う、うわあああ!」

そんな事を思つていると無駄筋さん(俺が命名)が金棒を振り上げるやつぱり見た目通りの短気な人のようだ。それでも冷静に素早く矢を放つ。矢はまるで引き寄せられるように金棒の方に当たる。

「うおっ! ?
「ヒイツ!」

金棒は予想通り無駄筋さんの手から吹っ飛ぶ。商人はもうびびつて馬車の上で丸まつている。無駄筋さんや他の盗賊は一瞬動きが止まつたが、盗賊の一人が俺の方に向いて叫んでいる。流石に遠くてよく聞こえないが多分「襲撃したのはアイツだ!」とか言つているのだろう。……おっ! 3人の盗賊がこっちに走つてくる。

他の4人は馬車の周りで商人が逃げないように囮んでいる。とりあえず俺は【奥義 パラライズアロー】を打つ事にする。【奥義 パラライズアロー】はダメージが与えられない代わりに当たれば80%の確率で相手が動けなくなる麻痺を発生させる事ができる。

「ウヒイツ！？」

「アハツ！？か、体がつ！？」

「……グフッ。」

走ってきた3人の盗賊がかなり個性的に倒れる……ムサイ男が「アハツ！？」とか言うなよ……なんだよ「アハツ！？」って。3人の盗賊を踏んで行きゆつくり残りの盗賊の所に歩いて行く。残りの4人は警戒しつつも俺に話しかけてきた。

「……貴様、何者だ！」

「ガツシユ達をよくも！」

「ガツシユ達つて……あつちで倒れている人達の事？ とりあえずここから離れたら見逃してやらないでもないわよ？」

正直精霊と話しただけだから言葉が通じるか分からなかつたが俺の喋つている言葉は通じているようで、盗賊たちがまだ若いエルフに見逃してやると言つてイラついているようだ。

「……チツ、おまえら！さっさと退散するぞ！」

残りの4人は3人の盗賊を担いで走つていいく……ふう、とりあえず一人も殺さずに何とかなつたな。太つた商人はこつちを見ている。なんか視線がとてつもなく嫌だ。表現するなら電車の中で女子高生に痴漢をする前みたいな視線を感じる……なんで分かるんだつて？ 私服の時は何回か痴漢を受けたことがあるからだ……

「大丈夫ですか？」

「ああ、助かりました。盗賊に見つかってしまうし、困ったもの
です。で、ど、どうですか？私の所に雇われてみませんか？え
え、ええお金は後で出しますよ？せめてオルアナ王国までいい
のでどうでしょ？……グヘヘ。」

「……」

話しかけるないなや、いきなり早口でいいまくる太つた商人。

おそらく、護衛という仕事以外にも美少女なエルフと会話が出来れば一石二鳥的な事を考えているのだろう。はつきり言ってこんな奴なら助けなきゃよかつたと思いつつ、おかしいことに気がついた。

「そういえば商人さん。何でこんな人が通らない道を通ったんですか？こんな人気のないところを通りているのが盗賊に見られたらそりや襲われもしますよ。」

「う……そ、それはだな。この積み荷が大事なものでな、いち早くとじけなければならなかつたのだよ。」

「ふーん……じゃあその大事な物をちょっと見せてください！その中身によつては雇われてあげますよ？」

「な！それはダメだ！」

「ふーん、ま、勝手に見ますけどね~」

「ん？ハハハツ！嬢ちゃん面白いことを言うねえ。この馬車は今、最近出来た【魔法 硬化】を使って防御力が上がつているんだ！

いくら嬢ちゃんの弓の腕がうまいからって壊れないさ。」

商人がニヤニヤしながら説明してくれた。【魔法 硬化】はその名の通り自分、もしくはパーティメンバーの一人の防御力を上げる魔法で、俺も持つていてるし、魔法使いがレベル5にもなれば覚えるような魔法だ。なんでそんな偉そうに自慢しているのだろうか。

「別に誰も壊すなんて言つてませんよ？」

「ん？じゃあどうやって見るんだい？」
「こうやって見ます【補助 サーチ】。」

【補助 サーチ】は、敵のモンスターや他人のキャラクターのレベルや装備などを見たり、フィールドに生えてる植物を探したりするのに使うスキルである。そしてこのスキルを使つているときは馬車の中のキャラクターのレベルや道具も見えたはずだ……【補助 サーチ】で見えた物は俺の想像通りの物だった。

【アリア レベル6 エルフ】

どうしてこんな人いない所を一人で渡るのか……多分人さらいのようなことをしたからではないかと俺は推測していた。もし違つたとしてもどうせ口クでもないものだつたに違ひない。俺は素早く馬車の後ろに走る。この馬車は外から中の物がみえないように窓一つない木の箱になつていた、唯一の扉は後ろにあるのを盗賊に近づいているときを見た。そこには南京錠で扉が開かないようになっていたが、俺は南京錠に対して魔法を発動する。

「【魔法 ウイングカッター】！」
「な……！」

商人が絶句しているのを無視して南京錠を風の刃で真つ二つにして、扉を開ける。そこには、エルフ特有の長い耳、肩につくぐらいの長さの黒髪、そしてぱっちりとした青い目は目を見開いている。俺は呆然としている商人の方にゆっくりと向き、今までの人生で2番目くらいの笑顔をする。

「あなたは私に人さらいの手伝いをさせる気だつたんですか？」
「うつ……ゆ、許してくれ！　こうでもしねえと女房と息子を養え

ねえんだ！」

「そんないいわけは聞きたくありません。死にたくなれば早く私の視界から去ってください。」

「ひ、ひいい！」

悲鳴を上げながら、草をかき分けていく商人。俺はそれをしばらく見ていたが、その目を馬車の中の少女に向ける。

「大丈夫？」

「あ、はい。」

「どうして連れ去られていたの？」

「え、えーとですね。私は、ハイナ教国の小さな村に住んで居たんですけど、定期的に村に商人が来るんです。私が外で遊んでいたら、馬車が一台だけだつたんで不思議には思いましたけど商人だと思って近づいたらきなり捕まえられてしまって。」

「そう、それは大変ね。」

「……そういうえばですけど、こいつてどこですか？」

「……それは、私も分からないの。」

「……ええー。」

黒髪の少女の呆れた声が草原にむなしく響いた。

第2話 初めての空の旅（少しだけ）（前書き）

視点変更が少しだけあります。

第2話 初めての空の旅（少しだけ）

とりあえず商人の置いていった馬車に一人で乗り、精霊の言つて
いた町をを目指す。今は背の高い草がない、物語ではよくありそ
な、なにもない草原を走っていた。アリアというエルフの少女（
14歳らしい）は自己紹介して馬車に乗つてからは全く会話がない。
……正直この沈黙は俺は苦手だ。しかし何か喋りたいけど、今
のこの世界のことはよく分からぬため何て話しかけたらいいか分
からないという状態に陥っている。

「……あの。」

「ん？ 何？」

「今、何処に行こうとしているのですか？」

「うーん、とりあえずこっちに行けばいいって精霊は言つてたんだ
けどねー。」

「何処の国の町かは聞きましたか？」

「ん？ 知らないって精霊は言つてたよ？」

「そ、そうですか……」

なんか、アリアは俺に不安げな目を向ける。まあ、何処に行つ
てるかさっぱりだから気持ちは分かるが。

しばらく移動し続けてきたが、日も沈みかけてきたので、アリア
ちゃんと野宿の準備をする。とは言つても、馬は周りの草を適當
に食べていた、俺は【召喚 ナイトウルフ】を発動していた、ナイ
トウルフはレベル50くらいでてくるモンスターだが一回に五匹
くらいで出てくる事が多く初心者キラーとも呼ばれたモンスターだ。
俺は、ナイトウルフを5匹程召喚し、モンスターが来ないかどう
か見張らせている。

「……あの、召喚どうやつたんですか？」

「どうやつたつて……スキルを使つただけだけ?」

「でも……召喚は三人がかりでやらないと出せないって……」

「え? そんなに必要なの?」

「えつ」

「……あなた何者ですか?」

「何者つて言われても……言つなら森の中ですつと引き籠もり生活をしてたとか?」

「……とかつて言われても……」

ひとまず世間知らずキャラで行けばなんとかなる……せつと。

（次の日）

とりあえず、起きて商人の置いていった食料を適当に食べ、ナイツウルフの召喚を解除する。【召喚】で出されたモンスター使い魔は大体1~2時間で自然に解除される。それ以外にもプレイヤーが解除を命令すれば消えてくれる。「マジック・テイル」では攻撃を一緒にしてくれたり、空を飛ぶモンスターなら乗つて移動したり等は出来たが、このちの世界ではもっと細かい命令を聞いてくれるようだ。

馬車にアリアと乗つていると大きな壁が見えてきた、ここが国境なのだね?……多分。

「……あの。」

「ん? 何?」

「入るのには通行証とか必要じゃないんですか？」

「……あーそうだよねー そうだろうねー。」

俺はとりあえず捨てられていた所をおじいさんに拾われ、森の中で生活していった世間知らずなエルフという風にアリアに説明したので通行証は無いと確信しているのだろう。

「とりあえず中に入つてギルドカードでも作れば国民扱いされますのでとりあえず中に入る方法を探したいんですけど。」

「……私いくつか思いついたけど……どうする？アリア？」

「中に入る方法ですか？ では言つてください。」

「……砦を破壊する。」

「……却下です。」

「な、なんでダメなの…！」

「むしろ聞きますけどどうやって破壊するんですか！？」

「そりゃあ、【魔法 エクスプロード】で……」

「明らかにダメです！目立ちます！」「

「じゃあ、あそこで見張っている騎士を【奥義 パラライズアロ

ー】で……」

「ダメですー！とりあえず目立つてもいいから他の人達に迷惑を掛けないようにしてしましょう。」

「うーん、ならモンスターを召喚して……」

「召喚して？」「

「砦を飛び越えちゃおうー！」

「……まあ、それでいいです。」

アリアはとても重いため息を吐いていた……流石に誘拐されて、いきなり見ず知らずの人と旅をしているのだつかれが貯まっているのだろう。俺は、とりあえずアイテムボックスを喚びだして、破魔の弓と矢筒を入れる。そしてアイテムボックスの中から純白の

杖を取り出す。この杖はシャイニングワンドというSランクの装備である。魔法攻撃力の高さと回復量の増加、光属性の魔法の威力上昇といった能力を持っている。何故破魔の弓からこっちに変えたかって？ 破魔の弓は、矢筒も一緒に持たなければいけないから重たいという微妙な理由なので気にしない事。

「【召喚 ペガサス】」

「はい！？」

なんかアリアがとても驚いているがそれを無視して真っ白な翼の映えた白馬が現れた。おお、現実で見るとなかなか格好いい！ペガサスは一年に一週間しかおきないイベント「伝説の駿馬を探せ！」でしか出てこないボスモンスターである。HPは高いし、上級魔法をガンガン浴びせてくる、そのくせ本人はよく逃げるためんどくさいモンスタートップ10にはに入るくらいのモンスターである。

「ほ、本物？私、物語でしか聞いたことが無いんですけど……」「本物、本物。さあ！乗つて乗つて！」

私が素早く跨がつてその後ろにゅっくりとアリアが乗る。
……

ちなみに馬車は置いといて、馬車を引いていた馬は私の使い魔扱いになつてましたよ、商人から盗つた時に捕獲した事になつたのだろうか？

「うわ！本当に空を飛んでるー。」「そうだねー。」

ペガサスで空を飛ぶと風が直に当たり中々気持ちいい。しかも俺は、飛行機にすら乗ったことがないのでとてもなく興奮しているが、アリアはかなりおびえているようだ。

「見て見て！皆があんなに小さい！」

「ちょっ…」こんなに高く飛ばないでください…皆を越えるだけなんですからもつと低く飛んでください…」

俺はもつと飛んでいたいが、アリアがあまりにもおびえて俺の体に抱きついて胸とかがくつつしているので、皆を越えて、一気に高度を落として地面に着地する。

「空の旅楽しかったじゃん？」

「…」こんなのだったら、本当に皆を壊した方がよかつたかもしません……」

「もう、そんなにすねないで、ね？」

涙目になつてているアリア……中々かわいいなあと思いつつも一人で国境沿いの町に歩いて進む。ペガサスは自立つから召喚解除した方がいいことアリアが主張するので召喚解除しておいた。

視点変更レイ レオード

「ふむ、では行つてくる。」

「了解しました団長…」このルードの町は必ずやお守りいたします…」

「ハハハ！その調子だ。」

私は、今オルアナ王国の国境沿いの町ルードにいる。今日、私の部隊任務は、ハイナ教国とオルアナ王国の間にあるアルネの森周辺の調査だ。

アルネの森は、戦争の後100年間足を踏み入れた者を返さなかつたという魔の森としても知られている。その理由は異常な程レ

ベルの高いモンスター達が原因である。そのせいで、今もどちらの国の領域になつていかない森だ。私の部隊はその森に足を踏み入れる予定はないがアルネの森からモンスターが出ていないか周りを調査するのである。

「ルブラン隊長！あ！レオード団長も！」

「うむ、どうした！」

「砦をモンスターが飛び越えてオルアナ王国に入りました！」

「何！何故止められなかつた！」

「そ、それが。そのモンスターがペガサスでして……」

「……ペガサス！？」

ペガサスは100年前の戦争の話にも出てくるモンスターである。飛びながら魔法を使い、空から雷を降らせて騎士や冒険者達を苦しませたといつ。そんなモンスターがオルアナ王国に入った！？

「もし、王都に入れたら！大問題になるぞ！急いで騎士を集めろ！ペガサスを探して討伐しろ！」

絶対に、王都には入らせん！

第3話 今後の作戦会議 それと騎士団長と遭遇（前書き）

見ててくれた方、こんな文章ですがありがとうございます。

第3話 今後の作戦会議 それと騎士団長と遭遇

さて、俺達が街に向かって歩いているとなんかジャラジャラと装飾がしてあるいかにも騎士の偉い人だという感じの鎧を着ている人が後ろのたくさん騎士を連れてこちらに向かってくる。

「何しに行くんだろうね？」

「……あの、レイさんものすごく嫌な予感がするんだけど。」

「え？ 何？ アリア悪いことでもしたの？」

「してません！」

アリアがそんなに悪い子だったなんて…… そんな事を思っていると、派手な騎士がこちらに気付き近寄ってきた。……え？ 何？ ナンパ？ だったら一瞬で火の海にするよ？

「すまない、そこのお嬢さん方。」

「うわ！ 鎧が喋った！」

「鎧なんですから中に入り居て当たり前じゃないですか。何言つてるんですか。」

「うーんアリアの突っ込みは中々厳しい。 派手な騎士が唐突に兜を脱ぐと俺たちに挨拶を……うわー！ 若ーーそしてイケメンな金髪のエルフであった。

「すまない、自己紹介が遅れた。 私はオルアナ王国騎士団長のレオーナだ。」

「え！ えーと、アリアです。」

「レイです。」

アリアは騎士団長だと知った瞬間にやら緊張しているよつだ。
とりあえず俺はこの、騎士団長を【補助 サーチ】でステータス
を見る。

【レオーナ エルフ レベル60 剣士】

騎士団長だとこのにそんなにレベルが高くないんだな。 もつ
と200位はあると思つたが。

「そんなに強くないんですね。」
「えつ？」

あ、口が滑つた。

「ちょ、ちょっとレイさん！何言つてるんですか！」
「貴様！団長のレベルがいくつか知つてているのか！」

騎士団長の隣にいた部下らしき人が話に入つてきた。

「うん、一応レベル60だよね？」
「レ、レイさんそんなけんか腰にならなくても。」
「ハハハ！おもしろい嬢ちゃん達だ！」

騎士団長が、豪快に笑つてゐる。 クソッイケメンめ……

「ところで、騎士の方々がこんな大所帯で何しに行くんですか。」
「ああ、そうだ。君たちに聞きたいんだがこっちでペガサスを見
かけなかつたか？」
「ペガサス……ですか？」

……」つかを見ないでくれアリアよ。

「ああそうだ、ついでに騎士達にペガサスが砦を乗り越えて王国内に入ったと報告があった。君たちも何か知っているか？」
「知っているというかなんといつか……その。」

「ペガサスを召喚したのは私ですけど……」

「「「……く？」」「」

騎士達が変な声を上げる。アリアは、小声で「……むひびひで
もいこや。」と呟いていたのは聞かなかつたことにしよう。

「やはり愉快な冗談を言つお嬢さんだ。召喚なんて君みたいな若い子一人いても出来ないよ。」

「じゃあ、見せ「すみません！ペガサスについては何も知りません！」「めんなさい！失礼します！」

アリアに声を遮られ引っ張られて猛ダッシュで騎士達から離れていくのだった。

「なんでそんなに急いでいるのよアリアは。」

「不法侵入したって事を堂々と言つていいようなものですからねー」「あ、そっかあ。」

全然気づかなかつた……

しばらく一人で歩いていると、街の門が見えてきた。この街は国境側は警備が厚いが国内からはかなり簡単に入れた。

「……からどうするんですか？」レイさん。

「……ん、とりあえず宿屋を探しましょうか。」

「……お金は？」

「お金……」

お金は今手元にはない。 とりあえず【補助 アイテムボックス】で中にお金がないか確かめる。

「あ、あつた！」

「……なんかジャラジャラはいつてますね。」

……アイテムボックスの中に直接硬貨が山ほど入っているとどう見ても宝箱にしか見えない。 アリアがアイテムボックスの中から一つ取り出す。

「……本物ですね。」

「アリアこれで宿屋には泊まれる？」

「こんなに金貨がたくさんあれば一生泊まれるんじゃないですか。」

「……とりあえず聞くけど、この銅貨と銀貨と金貨となんか白い硬貨と石で出来てる硬貨は大体いくらいかな？」

「うーん、石貨は1G、銅貨一枚で100G 銀貨一枚で1000G、金貨一枚で10000G。 そして白い硬貨は白金貨といつて100万Gなんですね…… 国回十の貿易くらいでしか見れないような代物ですよ。」

「マジック・テイル」ではお金は左上の方に100Gという感じで出ているくらいだったのによく分からぬが、神様が俺が持っていたお金を全て金貨とかに替えたのかもしれない。

「うーんつまりこっぽいあるっていう事?」

「……す」こまどめ方ですね。」

とりあえずアイテムボックスから金貨を数枚出して商人が置いていった袋にいれる。

「一応銀貨一枚あれば家族で一ヶ月は暮らせますよ。」「へえー。」

「つていうか門の近くでこんなにお金を見せびらかさないでください。」「誰もいらないからいいじゃない。 わた、早く宿屋に行こう。」「…………」

……そろそろ思ったが俺は世界観以前になんか非常識になつている気がする。浮かれすぎだろつか？

この街はレンガ造りの家が国境側の門から続く道に沿つて建つている。街の至る所では露天が開かれていてそこで、国境から出る人のための道具がたくさん売られているようだ。

俺とアリアは一人で歩きながら通行人に宿屋の場所を聞いて、向かう。

着いた宿屋の名前は「冒険の巣」。ギルドに所属してモンスター退治などを仕事とする冒険者達が多く泊まる宿だそうだ。宿屋に入るといかにも宿屋にいる気の強そうなヒューマンの女主人がいた。

「いらっしゃい！珍しいねえこんなか弱いエルフのお嬢さんがお二人とは。」「すみません。泊めてもらう事はできますか？」「ワンルームでいいのかい？」

「はい。」

「何泊するんだい？」

「とりあえず一泊ですよね？ レイさん。」

「うん、そうだよ。」

「一人で一泊……600Gになるけどいいかい？」

「はい！」

俺は袋から銅貨を6枚だし、女主人に渡そうとしたが女主人はなんか驚いた顔をしている。

「あんたらどうやつたらそんなに金貨を手に入れられるんだい？ どこか有名な貴族の人なのかい？」

「いいえ。ただの世間知らずです！」

「そうかいそうかい。中々おもしろいお嬢さんだね。名前は？」

「レイです。そして隣にいるのはアリアです。」

「そうかい。じゃあ部屋に案内するよ。」

女主人は機嫌良さそうに笑いながら、一階に上がり。104と札の付いている部屋の前まで案内し、部屋の鍵を渡す。

「ここは、荒くれ者の冒険者も多いから何かと気をつけなよ。後、朝食は八時、昼食は十一時、夕食は二十一時って決まっているから。食べなければ下の食堂に来な！ いらなければ来なくていいから。」

「はい！ ありがとうございます。」

女主人が降りてから部屋に入る。中は机が一つ、椅子が一つ、ベットが二つ、タンスが一つ、そして壁に時計が一つ掛けてあると、いうシンプルな部屋。俺とアリアはベットに座つたら、アリアが話しかけてきた。

「レイさんはどうしてそんなに、すごいんですか？」

「すごいってどんな風に？」

「どんな風について……お金をいっぱい持つてて、とても強くて召喚を一人で出来る。そんな人いまじやおとぎ話にしかいないですよ。」

「ふふふ、実は100年前から来たのだ。」

「そのほうが信憑性あります！」

「とりあえず目的はあるんだよね。」

「どんな？」

とりあえずアリアに精霊に言われた「魔神」の話を伝える……まあ、異世界から来た、というのはうやむやにしたが。

「それで何がしたいんですか？」

「とりあえず国の偉い人とかに伝えられたらな」と思つて。」

「多分オルアナ王国は無理ですよ？」

「えっ？」

オルアナ王国？……ああ、そういうえばレオーナとか言う人がオルアナ王国所属とか言つてたつけ。

「今、オルアナ王国はヴェルズ帝国と戦争寸前なので、そんな話は聞かないと思います。」

「大陸の危機なのに？」

「そんな信憑性のない話より。目の前の問題を第一に考える筈です。」

「確かに。」

「なのでとりあえずハイナ教国に行つた方がいいと思います。あそこはエルフ族がほとんどの国なので、オルアナ王国よりは話を聞

いてくれると思こますよ。」

「ふむ、なるほど。なら明日に、また鞆を飛び越えなくちゃいけないかあ。」

「……まあしょうがあつません。」

アリアの顔が青くなっているが、中々かわいい等と思つてこると女主人がやつてきた。

「ああ、そだお嬢さん達、もつお風呂入れるから、さつと入りてきな。旅で疲れたろう。」

……えつ？お風呂？

第4話 少女の回想と野の娘の話題（前書き）

最初はアリア視点、その後レイ視点になります。

第4話 少女の回想と男の娘の苦悩

視点 アリア

私は絶望していた。

私はハイナ教国にある小さな村の教会の神父の娘。 神父はハイナ教国では地位の高い役職であり。 村の中では他の家と比べて裕福な方だったがお父さんはそのお金をいつも村のために使い、 国からも村からも信頼されている人だった。

しかし、村の入り口の近くで一人で遊んでいたら。 人さらいに攫われてしまつた。 真っ暗な馬車の中でこの後どうなるのか不安だつた。 オルアナ王国は奴隸制がないので多分ヒューマンを第一とし、他の種族を奴隸にしたりしているヴェルズ帝国に送られてしまうのだろう。 そう思いながら、後悔していた。 どうして一人で遊んでいたのだろう、どうして商人だと思い近づいてしまつたのだろうと。 感じているのは振動だけ。 他は何も感じない、真っ暗、音一つない。

しかし、いきなり目の前が光で満ちた。 誰かが馬車の扉を開けたのだ。 最初は、ヴェルズ帝国にでも着いたのかと思ったが違つた。 目の前には銀髪で白いワンピースを着ていて真っ白で金の装飾の施された弓を手に握っているエルフの女人……エルフは二十歳になるまではヒューマンと同じように成長するので大体17歳くらいだろうか？ 彼女はその後人ざらいと口論をし、人ざらいが逃げ出していった。 そして彼女は私に手を差し出してこう言った。

「大丈夫？ 私はレイ。 あなたは？」

私にとって彼女は姫を救うおとぎ話に出てくる王子のよう見えた。……まあ、世間知らずな所もある人だったが、彼女が召喚をしたのには驚いた。

【召喚】は100年前の戦争の時には一人でも出来たらしいが、今は4～5人が命をかけて使わなければいけないらしい。彼女はそんな事を気にせず【召喚】を5回汗一つ流さずしてんのけた。ちなみに何故【召喚】が命がけになつたかと言ふと戦争の時に人々が殺し合い魔法が使える人や奥義を使える人……様々な技術が失われたらしい。今はなんとか持ち直したらしくが100年前には何もかも劣るらしい。しかもその後には伝説にしか出てこないようなペガサスすらも出した……飛んだときは気絶しがけましたよ……

色々と破天荒で世間知らずちょっと天然も入っているが彼女は嫌いにはなれない。なんだかんだ言つて彼女を私は信頼していた。精霊から聞いた「魔神」の話というのもすぐに納得してしまった。彼女に私はメロメロなのかもしない……別に好きって事じゃないからね！

視点変更 アリア レイ

「お風呂ですか～いいですね。」

風呂……女主人から聞いたその言葉に俺はふつうに答えた。

「じゃあレイさん一緒に入りましょうか。」「そうね一緒に……えつ？」

一緒に……だと。

「あれ？レイさん公衆浴場とかには入った事ないんですか？」

「え？……ええ。」

しまつた、俺は今女だった……といつ事は。

「アリアと一緒に入るっていう事？」

「それ意外に何があるのですか？」

……そういうえば中学の頃修学旅行で班決めの時、女子の班に入ることになつた事があつた。 女子達が勝手に班を決め、先生に決まつたと伝えたらしい。 僕は最初女子の班になつていっても先生がかしい事に気づくだらうと思つていたが何故か採用されてしまい女子と部屋を同じにするという出来事があつた。 しかも女子は俺を女子風呂に連れて行こうとし、俺がなんとか抵抗して男子風呂に入つたが、その時男子から。

「なんで女子が……つて陸は男か。」

つと言われ傷つきうなだれていたところ女子は男子がやらしい事をしたと勘違いし、俺のクラスがなにやらアメリカとソ連みたいな状態になつた事があつた。

あのときは違う俺は女の子だ。 それもかなりかわいい。 だが心は男だ！

「ちょ、ちょつと。 一人でっていうのは……」

「？別に大浴場だから大丈夫だよ？ もしかして小さな風呂だと思つてたのかい？」

ちよ、ちよっと何言つてるんですか！ それじゃアリアと……いやむしろ最高じゃね？ いやいやいや！

「私とでは、ダメですか？」
「うう……」

何でそんなにかわいい顔で上田遣いをしてくるんですか！」「これでも俺は男で……

「わかりました。 入りましょう。」「はい。」

俺の男とのプライドが軽く砕けた気がした。

風呂は宿屋の一階のロビーの奥にあった。 風呂は、男と女で分かれており木製の扉で分けられていた。 こいつのを見るとのれんを懐かしく思つてしまつ。 そして当たり前だが女の方の脱衣所に今居る。 ちなみに冒険者は男と女の比率が9対1くらいらしい。 そしてこの宿は冒険者しか泊まらない為女風呂はめつたに入らなければならぬらしい。

「?レイさん、どうかしました？」
「い、いいえ。 何でもないわよ。 何でもない。」「?どうですか。」

スルスルとアリアの服が擦れ合つ音が聞こえる。

「そりいえばアリアの服とでも汚れてるわね。 私の服貸そうか？」「えっ？ いいんですかありがとうござります。」

しまつた！ アリアの服がやけに汚れているのに気付きつい声を掛けてしまつたが。 今アリアは全裸じゃないか！ アリアの体は健康的な体をしており胸は少し控えめだが形がいい……中々いい体だ。

「レイさん、早く服脱がないんですか？」

「え、ええ。 他の人（女性）と一緒に入るのって初めてだから。

「へえ～森の中では一人だつたんですか？」

「まあね、ずっと一人でしたよ。」

そういうえば森の中でひきこもつていう設定でした。 自分で忘れていたよ。 さてずっとウダウダしていてもしあうがない意を決してワンピースを脱ぐ……あれ、ワンピースが胸に突っかかるつまく脱げない。

「もう、何してんですか。 レイさん。」

アリアが脱ぐのを手伝つて……田の前でアリアの裸体を直視しました。

「ご、ごめんなさい。」

「何がですか？ そんな事より早く風呂に入りましょうよ。 もう

7日間は入つてませんから。」

「……ああ、人さらに攫われて。」

「……ええ。」

服が汚れていたのもそれが原因か……

「まあ、じゃあ7日間分入りましょうか。」

「レイさん……はい！」

アリアの笑顔がとても眩しかった。ちなみに、アリアと洗いました。とてもスベスベだったよ！

夜、部屋に戻りネタ装備のパジャマを一人で着る。ちなみにアリアの服と俺のワンピースは女主人が洗ってくれると黙っていたが自分たちで洗つて部屋で乾かしている。

「この服とかどう?」

「……何でこんな位の高そうな服しかないんですか?」

「えーいいじゃない女神官の服。」

「私、父が神父ですけど、父もこんないい服着てませんよ。」

「え、あなたの父さん神父なの?」

「はい、ハイナ教の神父です。」

「ハイナ教? 確か明日行く国の名前つて。」

「はい、ハイナ教国です。エルフの人は大体ハイナ教ですよ?」

「へえ~! 例えばどんな教えがあるの?」

「例えば、食事の時は殺された者に謝罪と感謝をしなさいとか。」

「常識だね。」

「ですが、エルフ以外の人種は殺されて当たり前だという事を言いますから。」

「へえ~! あ、この服はどう?」

「さつきのに比べればマシですが……」

「どう? 魔導院の制服だけど。」

「魔導院……100年前にあつたといわれる魔力の学校ですね。」

「今はないの?」

「今じゃあ魔法を使えるのはごく一部の人だから……つていふかこんな服もどこで手に入れたんですか?」

「内緒だよ。」

「内緒ですか……まあこの服にします。」

「うん、一応Bランクだから大切にしてね~」

「Bランク……ですか？ 騎士の人も滅多に着れませんよ。」

魔導院の制服は分かりやすく言えば黒と赤のセーラー服のような感じの服である。デザインがいいと評判のBランク装備の一つだ。まあ、魔導院の依頼を500回以上やれば誰でももらえるから別に特別珍しいって訳じゃないけどね。

「捨てないでね~」

「捨てませんよこんな高そうな服。」

アリアがその服を割れ物でも触るかのような扱いをしており少し笑ってしまった。

追記 服を買う女子の気持ちが少し分かつてしまつた俺だ。

第5話 ちよつとした寄り道？

朝、目を覚ましたらアリアが目の前にいました。……うん、ちよつと落ち着こいつ。確かに寝た時は別々のベットで寝てたはずだ。

「ん？あれレイさん何で私のベットにいるんですか？」

「それ、こっちのセリフです。」

「え？ああー本当です！すみません！」

アリアが慌ててベットから出る……微妙にパジャマがはだけているのがエロイ……イカンイカンなんか興奮してきた。

「とりあえず準備しましょうか？」

「は、はい！分かりました！」

乾かしていたアリアの服をたたむ。アリアの服の汚れは落ちたが、所々破けており、やはり着れたものではなかつたので魔導院の制服をアリアは着た。俺はワンピースの皺を伸ばし、着る。

「おや、もう行くのかい？」

「はい、ありがとうございました。」

「別に感謝される事はないよ。これが仕事だからね。」

「じゃあ、アリア行こうよ～。」

「はい！」

「冒険の巣」を離れループの町の街道に出る。昨日に比べると人が多く、露天も賑わっている。町には冒険者らしき格好の人や行商人のような格好の人が多く見られる。

「……レイさん、私の格好かなり目立ちますよ。」「可愛いからいいんじゃない？」

「可愛いからって……一応王国から違法で出る前ですよね?」

「だからといって。コソコソするのは私には出来ません!」

「断言しないでくださいよ……」この服予想以上に下がスースーするんですけど。」

「ミニスカート穿くの初めて?」

「スカートはいつも穿いていたんですけど、ミニスカートを穿いている人は数える位しか見たことないです。」

「じゃあ、初めての経験って事でいいじゃない!」

「まあ、そういうことでいいのかな?」

二人で露天を眺めながら国境の反対側の門へ向かう。

「あ、ポーション売ってる。」

「ポーションはもつてないんですか?」

「生ものはアイテムボックスに入つてないよ。腐らせると大変だからね。」

「レイさんは入れたらそのまま忘れそうですね。」

「アリアはいちいちメモとか取つてそうね。」

「そこのお嬢さん達ポーションを貰うのかい?」

露天の商人が意外そうな顔をして聞いてくる。多分こんな軽装（見た目は）の美少女（俺基準）二人が露天で冒険者や商人しか買わないような物を見ながら会話していたからだろう。ちなみにポーションなどの生ものがアイテムボックスに入つていない理由は神様がアイテムボックスの中の生ものがあると知らずに腐らせて、においが大変になりそだから。というかなり現実的な理由で生肉などは抜いたらしい。

「じゃあ、ポーションを50個ください。」「えっ！？」

「レイさん、その人そんなにポーション売つてないですよ。」「うーん、まあないならいつか別に買わなくて。」

「……レイさんの金銭感覚中々スゴイですね。」

「いや、回復魔法も使えるし別にいいかな～って。」

「一応言つときますけど、回復魔法使えるのは十人もいませんよ。」

「え？ そんなにいないの？ 昨日の夜に魔法を使える人は少ないって言つていたけど、どうこいつこと？」

「それはですね……」

「ちょ、ちょっと待つてくれ！ お嬢さん達！」

ちょっと大事な話がされそうな時に露天の商人が話に割つて入ってきた。意外と気になつっていた事だったので不機嫌気味に答える。

「何ですか？ 個人的には大事な話の途中だつたんですけど。」

「いや、お嬢さん回復魔法が使えるつて言つていたよな！」

「まあ、使えますけど。」

「俺の妻が病氣で、ポーションじやあ直せないんだ！ なんとか治してもらえないか！」

「ポーションで、直せないのに回復魔法なら治せるつて言つの？」

「……確かに、薬じやあ直せなかつた病が魔法で治せたつて話は聞いたことがありますけど。」

「報酬はいくらでも出す！ だから治してくれないか！」

「一応……やってはみましようか。」

「レイさん、いいんですか？」

「いいも何もここまで頼まれちゃやるしかないでしょ。」「ありがとうござります！ あのいますぐでいいかお嬢さん達。」「ええ、かまわないわ。」

商人が露天を片付けると、街道の家と家の間の脇道を三人で移動する。

「……迷路みたいね。」

「はい、ハイナ教国にはこんな道は少ないですから私も初めてです。」

「迷つてしまいそうだね。」

「はい、道を覚えるのに大変そうです。」

「まあ飛べば何とかなるけどね。」

「……それはあくまで最終手段ですよね。」

「ま、この後その最終手段を使わざる得ないけどね。」

「……そうでした。」

「着きましたよお嬢さん達。」

着いた家は周りの家と比べても見た目は大して変わらないレンガ造りの家だ。家中に入るが、写真で見たようなヨーロッパの家を彷彿とされる部屋だ。その家の二階の部屋に寝ているヒューマンの女性がいた。

「……アイナ、回復魔法が使えるという人を連れてきた。」

「回復魔法？ どちらさまですか？」

「レイです。そしてこちらが共に旅をしているアリアです。」

「どうも。」

田の前の女性は見て分かるくらい弱っている。田の下には隈が出来てあり。顔が青白い。手が常に痙攣しておりいつ死んでもおかしくないというのは誰が見ても分かる。

「……若いわね。本当に使えるの？」

「ええ、一応は。」

「……そつ。」

とりあえず、俺は目の前の女性に【補助 サーチ】を使つ。

アイナ レベル15 ヒューマン 町人

ステータスをもつと細かく見たいと念じる。

HP 23 / 300 MP 30 / 30 状態異常 病

病？「マジック・テイル」にはなかつた状態異常だ。 とりあえずアイナの震える手を握り、全ての状態異常を治し、HPを回復させる【魔法 フェアリーライト】を使う。 アイナを光が覆つ。

HP 300 / 300 MP 30 / 30 状態異常 なし

「どうですか？」

「ええ、こんなに体が軽いのは3年ぶりです。 ありがとうございます。」

「いいえ、私が出来ることをしただけです。」

正直言つて思つていた以上に簡単にできてしまい少し拍子抜けだつた。 しかし状態異常病とはなんなのだろうか？ 後で調べないとな。

「レイさん、治療終わりました？」

「うん、出来たよ~」

「も、もうですか！お嬢さん！？」

「そうですよアイガ。 この人は私の命の恩人です。 感謝しても

仕切れません。」

「いえ、出来る事をしただけです。 たいしたことばしていません。

「レイさんってほんと何でも出来るんじやないですか?」

「レイさんってほんと何でも出来るんじやないですか?」

いやいや、流石に出来ない事はあるよ?

「とりあえず、何かお礼をさせてもらいたいのですが……」

「うーん、なら……この事を他の人に話さないでくれるかな?」

「え、それだけですか?」

「ええ、それだけです。」

いわれると面倒臭くなりそうだしね。

「分かりました……何か用事があるのでしょ?」 しのじとは黙つておきます。」

「うん、よろしく。」

とりあえず、アリアと一緒に家から立ち去るが何故かアリアは不思議そうな顔をしている。

「どうしたの?」

「いえ、ちょっと意外というかなんというか。 もうちょっと堂々と治したんだぞ~ってアピールするかと思いました。」

「……そうしたい気持ちもあるけど。 自慢したら病人がたくさん来て今後の事に支障をきたすと思ったの。 そういう内に「魔神」が来たら色々と大変じゃない。」

「意外と考えていたんですね。」

「むしろ私は、アリアに何も考えていないと思われていたのね……」

「いえ、そういう意味で言ったわけじゃ。」

「」

「お母さんば、悲しげわあ～。」

「あなた私のお母さんじやないでしょー。」

「といふで、アリア一つ聞いてもいい?」

「何ですか?」

「……こい、何処?」

「なんの確信もなく歩いたんですか!?」

「つづきアリアが道を覚えてると黙つてアリアに付いていつたら

……」

「レイさんが何の迷いもなく進んでくるとおもつてこたのこ……」

周りにはレンガ造りの家、正直景色がわざから変わらない
ひつなれば。

「空を飛ぶしかないかな~。」

「あ、まだ歩きましょー。迂回ねねえめあですー。…………わひと。」

「ついして俺たちは脇道をまだまだ迷ひのであつた。

第6話 迷子になつて見つけた物は……

迷つて大体30分近くたつた気がする。景色はさつきから変わらないが、ちょっと奥地に行つているような気もしなくもない。

「うーん、完璧に迷つたわね。」

「ま、まだいけます……。」

アリアの声が震えている。そんなに空を飛ぶのがそんなに嫌なのだろうか？ アリアを少し心配しつつも一人でその後も歩き続けるとふと鈴の音が聞こえた。

「ギロチンの音！？」

「なんですか？ それ。」

しまつた。このネタはアリアには分からなかつたが、当たり前だけど。とりあえず音源を探すと、路地のさらに狭い細道に黒猫が一匹こっちを見つめている。その黒猫はちつちつな黒いコートのようなものを着っていて野良猫ではないようだ……もしかしてこの猫は。

「黒猫さん？」

「はい？ ああ黒猫がいますね。」

「黒猫じゃないよ！ 黒猫さんだよー。」

「それって重要な所ですか？」

「うん！ とっても重要だよ！ あの子使い魔だもん！」

「えつ！ つていうか何でそんなに目がキラキラしてるんですか。」

黒猫さん……俺が、「マジック・テイル」をしていた頃手に入ら

なかつた使い魔の一つだ。使い魔は、使い魔専門の店で契約をす

ることで【召喚】をすることが出来るようになるのが大体だ。だ

が他にもイベントや依頼、で使えるようになる物等もいる。黒猫

さんはその後者にあたる使い魔なのだが入手条件がかなり厳しい。

黒猫さんは一年に一匹「マジック・テイル」のどこかに出現し、

それを捕まえれば使い魔として使えるという使い魔の為手に入れら

れるのは運以外のなにものでもない。黒猫さんは闇魔法が使え後

方からの援護にはとても便利である。あとさらにプレイヤー達を

魅了させたのが【補助 变身】という一部のモンスターしか持つて

いないスキルを持っていて、戦闘には関係ないが黒い服をきた12

歳くらいの美少女になることが出来て、一部のプレイヤーは血眼になつて探しているという噂を聞いたことがある。はつきり言おつ。

黒猫さんが欲しいです！

その、黒猫さんが細道の奥に逃げる。

「あー待つて！黒猫さん！」

「ちょ、ちょっと… レイさん待つてください。」

俺の制止を無視して黒猫さんはどんどん奥に進む。まるでどこかに誘おうとしているようだ……

「レ、レイさん……ちょ、ちょっと待つて。」

「あれ？アリア顔が赤いよ？ 大丈夫？」

「レイさん、足… 速すぎ。」

黒猫さんを追いかけたが、アリアが息を切らしてしまい、一人で休憩する。どうやらこの体は、身体能力もレベル500相当になつているらしい、ちょっと動いた程度では何ともない。

「あれ？レイさん。」

「ん? 何?」

「黒猫さんがここ見てますよ~。」「え?」

俺が、後ろを振り向くとこちらをジーンと黒猫さんが眺めていた。なんだかその眼は俺に何かを期待しているよりも俺を感じた。

「黒猫さん、黒猫さん。」

「?」

黒猫さんは首を横に振る…… やはりダメか。

「じゃあどうすれば捕まってくれる?」

『おこじこ』

「お、鬼ごっこですか。」

『私を、どうやってでもここから捕まえて見せて。』

どうやら黒猫さんはテレパシーが使えるようだ!

「どんな方法でもいいのよね?」

『うん。』

「じゃあ行くよ~。」

「へ、レイさん……本気でやるつもりですか。」「もちろん~。」

「少しほは町の事を考えてくださいね。」

「多分壊さないよつにはするよ。」「

「絶対に壊さないでくださいー。」

黒猫さんが素早く走つて俺たちから遠ざかる。

「アリアー！ 黒猫さんを追つて！」

「えー？ はい！ レイさんは？」

「色々と用意をする！」

「分かりましたー！」

アリアが黒猫さんの後を追いかける。 じつは色々と聞かずに行動してくれるのはアリアのいい所の一つだろ。 俺は、アリアが走つていくのを見た後に準備をするのであつた。

視点変更 レイ アリア

レイさんは準備をするといつていたが。 何をするつもりなのだろうか…… とりあえず町を壊さなければいいが。

黒猫さんはまだ路地を走つていぐ。 正直付いていくのがやつだ。

「うわーー！」

路地を曲がつたところで黒猫さんがこいつに飛んできた。 そのまま私を踏んでジャンプで家のベランダに登る。 レイさんなら普通に空中を歩くぐらいならやってのけそうだが、私はそんなことできないじつしたものかと悩んでいると。 いきなり路地をふさぐかのように蜘蛛の巣のようなものが一つ張られる。

『何！？』

「つ～か～ま～え～た。」

「レイさん！ いつたい何ですか！」の蜘蛛の巣は…

「ん？ トラップスパイダーの巣よ？」

トラップスパイダー……それは入ぐらいの大きさの蜘蛛であり、このモンスターのいる森は落とし穴や蜘蛛の巣といったトランプを大量に仕掛けることで有名なモンスターで騎士の部隊がトランプスパイダーの居る森に行くと3分の1は殉職するほど危険だそうだ。

『だが、まだ。』

「言つておくれけど。 空にはシムルグがいるわよ？」

『えつ。』

「はい！？」

シムルグはおどぞ話にしか出でこないペガサスと同じくらいう現実にはいないだらうとするら言われているモンスターだ。 話の内容は大体世界の始まりからいる鳥だとか…… 正直レイさんならもしかしたら召喚出来るかも……と思つ気持ちもある。 そんな事思つていると、ふと空が暗くなる。 ゆっくりと顔を上げると田の前には軽く家よりも大きい鳥が……

「本物ですか！？」

「アリアまた驚いてるの？ ペガサスを見ても驚いていたじやない。

「そりやあ驚きますよ……」

準備つてこれのことですか…… レイさん。

「ああーて、私の使い魔になつてもうおつかしい？ 黒猫さん。」

『……わかった。』

レイちゃんの目的の黒猫ちゃんは彼女の使い魔になることを決めてくれたようだ。……まあ、シムルグまで召喚されれば認めてるしかないだろ?ナビ。

「つていうかレイちゃんどうやつて追いついてきたんですか?」

「ん?シムルグに乗つてね~アリアの姿を探したんだよ~。」

「単純で恐ろしい探し方ですね。町とかは壊してませんよね。」

「もちろん!騎士とかに攻撃されたりしたけど町を壊しては居ないよ~!」

「攻撃されたなんですか!?」

まあこんな大きいモンスターが町に出たら攻撃するよね。騎士だもん。

『あなたたちがじゅれ合つてる内に契約が終わりましたよ。』

「おお、やつたー! ありがとう黒猫ちゃん!」

「じゅれ合つてるつて……」

せつからそんな風に見えてたんですね。 とこつか黒猫ちゃん時々毒舌ですね。

「……とこつかシムルグさん立つて騎士が来りやつさじや……」

「あつ。」

「考えてなかつたんですか!?」

「ついつい黒猫さんに意識が向いちやつて……テヘッ。」

「テヘッじゃないですよ~ どつにかして早く町から出なさい。」

『町から出るだけならシムルグに乗つて出ひやえば?』

「それだ! ナイス! 黒猫さん!』

「……もつ飛ぶ事は決定ですね。」

もへ、覚悟は決めよつ。遅かれ早かれ空を飛ぶんだし。

「といひでどいやつてシムルグに乗るんですか?」

「そりやあ、空中を歩いてシムルグに……」

「やつぱ歩けるんですね。」

「やつぱ?」

「……いえ、こつちの話です。」

「じゃあ、早速行こひー。」

「え、ちゅ、ちゅつヒー?」

レイちゃんに俗に言つお姫様抱っこの状態で抱えられ。そしてそのままゆつくつと空中を階段があるかのように歩き出す。第三者の視点で見ると絵にはなるだろつが、当事者は中々恥ずかしい。ついでだが私の腹の所に黒猫さんがベランダからジャンプしてきた。こうして見ると背中についている小さなコートと合わせて中々かわいい。そして、ゆつくつとシムルグの上に乗つたら私と黒猫さんを下ろした。

「よし!出発進行!」

「は、はー!」

『……空を飛ぶのは初めて。』

シムルグがゆつくりと翼をはためかせると下の路地が風ですごいことになつているのが見えるが今は気にしないことにしよう。そして一気に飛ぶ。その頃、ちょうど下に来た騎士達が吹つ飛ぶ。うん、今は気にしない気にしない、多分死んでないから大丈夫。

そして、シムルグは悠々と階を越えるのであった。

第7話 空の旅とアリアの歴史の授業

視点変更 アリア レイ

シムルグで国境から離れる。アリアは地上を見なによりこして
いるのがかわいらしい。

「ねえ、黒猫さん。」

『何?』

「黒猫さんは召喚解除されないの?」

『何で?』

「ん?」

確かに【召喚】の使い魔は契約した直後に召喚解除して消える筈だ
(確か)。

「じゃあ、黒猫さんはいつ召喚解除するの?」

『むしろ召喚解除されなくちゃいけないの?』

「え、じゃあ半日で強制解除されるまで待つの?」

『強制解除? 何それ?』

黒猫さんは全く強制解除はないそうだ。やこり辻は「マジック・
テイル」との違いがあるようだ。

「じゃあ、黒猫さんはずっと一緒にいる気なの?」

『悪い?』

「いや、悪くないけど。」

「と、とにかくでレイさん……」

「ん? 何? アリア。」

顔が真っ青になつてゐるアリアが俺に話しかけてきた。

「何処までシムルグで行くつもりですか？」

「う～ん、とりあえず国境まで？」

「やっぱり飛び越えるんですか？」

「まあね。」

「けど、ハイナ教国なら飛び越えなくともいけるかもしだせんよ？」

「何か方法があるの？ 門番を倒すとかは無しだよ。」

「しませんよ、そんなこと。」

顔が真っ青になつていても冷静につっこむアリアは凄いと思いました。

「オルアナ王国みたいに皆があるので、検問所から直接行きます。」

「やっぱ倒す作戦じやん！」

「違います！ 検問所のところで人さらいに攫われたけどなんとか逃げてきましたって言うんですよ。」

『そんなのでいけるの？』

「いけます！」

「どうしてそんなに自身満々？」

「ハイナ教国の国民はエルフの人の言うことは結構信じるので。」

人の良心を利用する氣かアリアよ……

「そういえばだけど、アリア？」

「何ですか？」

「魔法がどうして衰退したのか聞いてなかつたよね？」

「ああ、商人に邪魔された話ですね。」

『何の話?』

「う~ん使い魔の黒猫さんには関係ない話かな~。」

「まあ、使い魔さんは人間とは違いますからね。」

『けど、気になる。』

「まあ、話しますね。」

シムルグの上でアリアの講義が始まりました。

「100年前に戦争があつたのは知っていますよね。」

「まあ、一応は。」

『知ってる。 そんなに生きてないけど。』

「じゃあ、レイさんに質問です。 戦争で一番危険視される職業は知っていますか?」

「ん? そりやあ魔法使いとかの遠距離から強力な攻撃が出来る職業でしょ?」

「その通りです。」

「マジック・テイル」には国同士の戦争というイベントもあつたので分かる。 空から大量の隕石が降つてきたりするのにびびる。

「それ以外にも死んだ人を生き返らせる魔法とかも昔はありました。」

『蘇られたら厄介。』

「大体そういう危険視されるのは魔法が殆どでしたので戦争の時に真っ先に狙われたのはどここの国でも魔法が使える職業でした。」

「ふむふむ。」

「だから戦争の最初の頃から魔法を使える人は一気に減つたらしいです。 サラに国にある魔導書なんかも焼き払われてしまつたらしいです。」

「なるほど、それで魔法を教えられる人がいなくなっちゃったのか。」

「はい、だから今は魔法をまた1から研究している所なんです。」

「マジック・テイル」ではレベルが上がれば魔法を覚えたがそちら辺は違うのだろう。

「ハイナ教国はその魔法の研究が一番進んでいる国なんですよ。」「へえー。」

アリアが自慢げにしている。自分の国を誇りに思っているのだ
うつ。

「あ、国境が見えてきましたよ。」

『茨の壁がある。』

「オルアナ王国のとは全然違うね。」

ハイナ教国は国境が茨で囲まれているようだ。触つたら痛そう
だ。

「確かこれも魔法で作ったらしいですよ。」

「魔法は便利だね~ ハイナ教国は羨ましいよ。」

「シムルグに乗りながら言いつセリフじゃありませんね。」

確かに、移動にはとっても便利だね!

「さて、アリアが慣れてきたところ悪いけど降りましょうか。」「確かに慣れましたけど……早く降りてくださいよ……。」

シムルグから降り徒步で移動する。

『やっぱ地上が一番。』

「そうです。 その通りです黒猫さん。」

なんか奇妙な連帯感を持つていてる一人をほほえましく見ながら進む。

「そういえばさつき居たのはオルアナ王国で今向かっているのはハイナ教国よね？」

「はい、そうですよ。」

「それ以外に国つていくつあるの？」

「マジック・テイル」では4つあつたけど今はまだ4つなっているのだろうか。

「国は3つですね。 それと国ではないですが、ライヴァン同盟つていうドワーフの集まつた集落が1つあります。」

「国じゃないの？」

「国ではないのですがほぼ国みたいな物です。 オルアナ王国は一番種族に関することは平等な所ですね。 国王はヒューマンですが貴族は頑張ればどの種族でもなれますよ。」

「アリアは物知りだね~。」

「一般常識です。」

「じゃあ、ハイナ教国はエルフが中心の国なんだよね。」

「つというか、国民の殆どがエルフの国ですね。 言つたとおり魔法の研究をしている国です。 あとハイナ教の信者の集まりです。 国のトップはハイナ2世で、女王様です。 後唯一のハイエルフらしいですよ。」

「へえ~ ハイエルフ……」

「…」

「…」

「テイル」と違うのかな?

「残りの一つの国はヴァルズ帝国ですね。ヒューマンを中心の国で、エルフや獣人つといった人を奴隸として攫つたりしているそうです。」

アリアが苦い顔をしながら話す。

「攫う？じゃあ、あの人さらうって。」「……多分ヴェルズ帝国に売ろうとしていたんじゃありませんか？」「奴隸つて他の国じゃあ認められていらないの？」「ヴェルズ帝国以外では認められていませんよ。」「あそこ、嫌い。ヒューマンが偉そうにしてる。』

黒猫さんが露骨に嫌そうな声を上げる……猫だから顔はよく分からぬけど。

「後、ライヴァン同盟はドワーフ中心の集まりで、殆ど的人は鍛冶職人です。他の国と装備を貿易する事で利益を得ています。」「どんな装備があるんだろう。一回行ってみたいな。」「多分レイさんの持っている装備に勝るのは一つもないと思いますよ。」「100年前の戦争の影響？」
「ええ、魔法以外にも色々と失われたそうです。」「よくここまで復興できたね。」「人間の意地は怖い。」「意地つて……。」

黒猫さんも居ると三人で会話が弾む。それにこの世界の事も大体分かった。

「やっぱ、女が三人居れば……なんだっけ？」
「姦しいですか？　しかも使い方違うと思いますよ。」

視点変更 レイ レオーナ

オルアナ王国首都アルノ　ここは国王の住む城を中心に内側から貴族、平民、貧民の順で円形になつてゐる都だ。ここに私は緊急で来た。用件は二つ。一つはペガサスが砦を越えて侵入してきたという事。侵入したのは見たという報告があるが、何処に行つたのか不明。今も捜索中だ。もう一つはシムルグがループの町に現れたという事。これはいきなり町に現れたことから何者かによって召喚されたとされているが。どうやって捕獲または契約したのかは不明という事もあって、騎士の間じやあヴエルズ帝国のスパイじやないかという説もありこちらも調査中である。正直こんな大事が二つもあり、これを王様に報告しなければならないというのは色々と気が引ける。

「失礼します。」

「ほう、レオーナか。どうした？　アルネの森の調査は終わったのか？」

「いえ……それが至急報告しなければならない事が……。」

「何？」

「それが……」

とりあえず現国王に用件を伝えると王がなにやら悩んでいる顔をしている。まあ、いまじや伝説のモンスターが一体も発見されたというのだから当たり前だが。

「王……？」

「いきますぐ、捕まえろー。」

「はつ？」

捕まえる？ セめて討伐とかでは？

「そのようなモンスターを使えるようになれば、ヴェルズ帝国との戦いにも使えるぞ！」

「で、ですが。我々だけでは……」

「つべこべ言わず捕まえよ！』

「は、はい。』

オルアナ王国の現国王は四代目である。今の国王はハツキリ言うと自分勝手である。自分の欲しい物は意地でも手に入れようとしてしまう。前のヴェルズ帝国との対談でもその性格のせいで関係が悪化してしまった。この国王の事だから捕獲しないと気が済まないのである。正直言つてかなり困ったことになつたぞ……。

第8話 いざ！ハイナ教国へ！

視点変更 レオーナ レイ

やつと、ハイナ教国の国境の前に着き、茨の砦を見上げる。

「……今更だけどこの茨大きすぎない？」

「一応季節によつてはバラの花を咲かせるようですよ。」

『見て見たい。』

「私も見たことないですね。」

二人と一匹で話しながら砦に沿つて歩いて歩いていると検問所に辿り着いた。検問所にはエルフの男が一人居た。二人の格好は真っ赤なローブを着ている。初めて見る装備で少し興味がある。二人のエルフは俺たちの姿に気づいたらしくこっちに話しかけてきた。

「おや、どうかしました？」

「あ、あのですね。」

とりあえず一人にはアリアが攫われた事、私が助けたことを伝えた。

「それは大変でしたね。少し持ち物検査をしたら入つていいですよ。」

「え、もつと何か確認しないの？」

「ええ、ハイナ教を信ずる者を疑うなです。エルフは皆ハイナ教を信じていますから。」

「そうですか。」

エルフは良くも悪くも人を信じる種族であるようだ。もう一人

のエルフが黒猫さんに目を向けて俺に聞いてきた。

「ところでこちらの猫は……？」

『レイの使い魔です。』

「喋れるのか！？」

「ええ、使い魔ですから。」

「使い魔でも喋れない者は居ますよ。」

「ま、まあ使い魔なら大丈夫か……済まないが一こちらの部屋で持ち物や装備を点検させてもらうよ。」

「はい。」

真っ赤なロープのエルフに連れられて歩く。

「ねえ、アリア。」

「何ですか？」

「この人達って軍か何かなの？」

「ああ、この人達は魔導隊です。」

「オルアナ王国でいう騎士みたいな人達です。」

「あのロープ欲しいなあ……。」

「そこですか……でもあのロープ、鎧みたいに防御力があるらしいですね。」

「ランクは？」

「確かDですよ。」

「Dがあ……じゃあいいや。」

「結構現実的ですね、レイさん。」

「私も色々あつたんだよ……。」

運営が悪ふざけで出現した東京ドーム位の大きさのモンスター「魔法城ジャイアントスパイダー」を捕獲しようとしたり、国同士の戦争で俺ばかりが狙われたり……見た目重視じゃあどうしようも

ないと思い知らされた……聖女のワンピースがなければもつと『パンツ』
イ装備になっていただろ。

「……とつあえず、ここで待っていてください。担当の隊員を呼
びますので。」

部屋で待つみつけた魔導隊の人の顔がやや引きつっている。
どうやらさつきの会話を聞いていたようだが無視する。しばら
くすると同じ真っ赤なローブを着た女性がやってくる。

「お待たせ、じゃあ準備するからちょっと待ってね。
何をするんですか？」

「ん？【補助 サーチ】であなたの装備とかを調べさせてもらひつよ、
個人情報とか軽く無視しちゃうけどせこいら辺は勘弁してね。」

「私は、それでいいですけど。」

「うん……まあいいかな？」

「？レイさん何か問題あるんですか？」

「い、いや何もないよ？」

……今、ハイエルフでエルフマスターでレベル500だよな？
今の世界の状況からして俺はイレギュラーな筈。どうにかして隠
したいがどうすることも出来ない。

「よし、準備完了。じゃあやるよ？ 大丈夫？」

「はい。」

「う、うーんまあ。」

「じゃあ、【補助 サーチ】。」

魔導隊の人アリアを凝視して、しばらくしたら紙に何か記して
いる。多分名前とかを書いているのだろ。

「じゃあ、次は……つえー?」

「どうかしました?」

魔導隊の人があのを見て固まる。

「……ハイエルフでエルフマスターってあなた何者ですかー?」

「あ、やっぱり珍しいんだ。」

「珍しいってもんじやないですよ! ハイエルフなんでもう、女王様しかいないと言っていたのに。」

「レイさんハイエルフだつたんですか。 てっきりホーリィエルフくらいかと思つていましたが。」

「そうだよ。 褒め称えてもいいんだぞ。」

「実際に褒め称えられてもおかしくないです。」

「そ、それは困るね。」

俺は自由に生きるんだ!

「あ、このことは報告書に書いても良いけど色々な人に言いふらしたらダメだよ。」

「は、はい!」

検査を終え、すぐにハイナ教国内に入れた。 なにやら魔導隊の人達が敬礼をしていた。

「何で、みんな敬礼していたんだろう?」

「ハイエルフはハイナ教では神に近い存在ですからね。 女王様くらいしかハイエルフはいりませんよ。」

「ほー。」

「理解します?」

「流石に分かるよ。」

ハイナ教国は国境に沿つて森があるとアリアが言つていて、中々大きい森だ。アリア曰く侵入者とかを精靈に教えてもらうためらしい。

「そういえばアリア？」

「何ですか？」

「あなたの故郷つて何処？ 首都に行くついでに送りたいのだけれども。」

「私の居た村ですか？」

『それ以外に何があると？』

「……私としてはもっとレイさんと一緒に旅をしたいんですけど。」

「何で？ お父さんやお母さんには会いたくないの？」

「会いたくないって訳じやないんですけど……村から外にでたのは初めてで、レイさんと出会えたんだつたら人さらにに攫われたのもよかつたかもつて思つてしまつ私もいるんです。」

「ううん、確かアリアの家つて教会なんだよね。」

「はい、ハイナ教国は貴族が居ない代わりに聖職者が高い地位に就いていますからね。よく言えばお嬢様、悪く言えば箱入り娘っていう感じですかね。まあ、村には友達もありますし、商人の人とも喋つたりはしますけどね。」

「でも、色々と知つていたよね。」

「それは全て本からですよ。初めて見る物ばっかりでしたから。」

アリアがやや自嘲氣味に笑う。

「つまり、アリアは家族を心配させたくないが。 もっと外を見たいって訳だね。」

「……はい、そうです。」

「なら、簡単だよ！」

「……何かいいアイテイアが？」

「アリアのお父さんとお母さんに自分の気持ちをハッキリ言つて。私と居てもアリアが安全だという事を証明すればいいんだよ！」

「……レイさんは私と居ても迷惑じゃないんですか？」

「迷惑なわけないじやん！ むしろ私がアリアに助けられてばつかりじやない！」

「レイさん……ありがとうございます……。」

アリアが半分泣きながら答える。親の問題か、俺も昔はスカートを履かせようとしてくる母や姉に怒つて、三日間家出したこともあつたもんだ。アリア位の歳（俺もだな）の時には大体悩む物だというからな。アリアの友達として出来る事をしてあげたいと俺は思った。

「大丈夫！ あなたの事を言えばきっと分かつてくれるつて…」

「はい……そうですね……。」

「じゃあ、善は急げだね！ すみませーんそここの商人さん！」

「ん？ 何だ？ 嬢ちゃん達？」

私は、後ろからきた商人の馬車に話しかける。

「護衛ついでに私達を乗せてください…」

「い、いきなり唐突だね……。」

『使い魔付きだよ。』

「うお！ 猫が喋った。」

「お、お願ひします！」

「私をタダで雇えるんだから乗せなさい！」

「何故そこで命令口調なんだお嬢ちゃん！ まあ、いいけど。どこまで行くんだい。」

「何処？ アリア？」

「え、えっとシイラ村まで。」

「シイラ村？ ああ、ちょうど休憩地点にしようと思つていたんだ。

いいぜ。」

「ありがとうございます。」

『感謝する。』

商人は了承してくれたので荷馬車に乗り込む。今回乗った荷馬車はアリアを攫つた人さらいの物とは違い窓が二つ有り、中には木箱がいくつか置かれている。窓にはガラスがはめられている。

「おー！ 意外と広い！」

「お嬢ちゃん……いきなりで結構失礼だよね？」

「そんな事は気にせずに行こう！」

「一応気にななくちゃいけないと思いまますけど……。」

『早く行きたい。』

「……まあ、いいやお嬢ちゃん。 しっかり護衛をしてくれよ。』

「もちろん！』

さあ！アリアの故郷へ！

第9話 キモイのは苦手ですか……。

「うーん、馬車も中々いいねえ~。」

シムルグで空を飛んで移動するのもよかつたがゆっくり地上を歩くのも中々いい。今は森を抜け草原を馬車はゆっくりと歩いている。

「やっぱシムルグよりはこっちの方が私はいいですね。」

「地面に足が着いている方がいいの?」

「まあ、そういうことですかね。」

「スレイプニルとかは良いの?」

「……多分無理です。」

とりあえず俺は【補助 探知】で自分の半径500mを見張る。中にモンスター等の反応があれば感覚で分かるようになっている。

「商人さん、今のところ周りにモンスターはいませんよ。」

「ん? お嬢ちゃん何か魔法でも使えるのかい?」

「まあ、使えますよ。」

「へえ~ それなら護衛してもらつて正解かもしれないな。」

「そうでしょう、そうでしょう。」

俺は胸を張つて答える。こうした後に自分の胸の大きさを自覚して、軽くうなだれる。そりいえば女だったと……。

「そういえば、商人さん。後どのくらいでシイラ村に着きます?」

「うーん、大体二、三日かかるかな?」

「一、三日があ~。」

中々時間がかかるな。やっぱスレイプニルを使った方が早いかな？

「とりあえずレイさん。変なモンスターは召喚しないでくださいね。」

「変なモンスターは召喚しないよ！ かつここにモンスターを出すだけだよ！」

「そこが問題です！」

こつものやりとりをしながら馬車に揺られながら進むのであった。

「そういえば、何を運んでいるの？」

「ああ、ライヴァン同盟から買った、武器をハイナ教国の魔導隊や冒険者に売るんだ。剣はエルフ達にはそんなに卖れないが、エルフ以外の冒険者も首都にはいるからな。」

「へえー。」

エルフは他の種族に比べて物理攻撃力と物理防御力が少ない。

その分魔法攻撃力と魔法防御力は他の種族に比べて高い方だ。そのせいか「マジック・テイル」の頃から剣士になるエルフは俺くらいしか見たことがない。 といえばオルアーナ王国の騎士団長は剣士だったな、風変わりなイケメンもいたものだ。

「レイさんつて武器色々持つてますよね？」

「ん？ まあ持ってるよ？ いきなりどうしたの？」

「いや……前は弓を使ってその後は杖……他にどんなのを使うのかな～っとふと思っただけです。」

「う～ん、他には……剣も使うしナイフも使えるし、銃も撃つし、

鞭もあるし、槍だって使えるし……大体の武器は使えるんじゃないかな?」

「どんだけ武器あるんですか……。」

まあ、エルフマスターは伊達じやないね。

「ん? 商人さん。 前方にモンスターが五匹くらいです。」

「なんだ? 魔法に引っかかるのか?」

「そんな感じです。」

まだどんなモンスターか分からぬが、破邪の弓をアイテムボックスから取り出す。

「どうするんだい? お嬢ちゃん。」

「そのまま前進してください。」 いつに来た前に全員倒します。

「レイさん出来るんですか?」

「もつちろん!」

「本当に出来るのかい?」

「レイさんが出来るって言ひたので出来るんじやないですか?」

モンスターとの距離が約200mくらいになつたところで【補助ホーカー】を使う。

「うわっスライムじゃん。」

「強いんですか?」

「いや、キモイ。」

「そ、そりですか。」

「スライムをキモイで片付けられるのか……。」と商人が呟いて

いるが無視する。スライムはレベル5からレベル40くらいのモンスターもいる序盤によく見るモンスターだ。だがドクエのよくなかわいい姿はしておらずとにかくキモイ。表面がやけにテカテカしてる。「マジック・テイル」の時もきもかつたが現実に見るとかなりキモイ。

あまり見たくないのでさっさと済ませようと矢筒から矢を取り出し、弦を引く。

【奥義 レインアロー】

「奥義使うほど見たくないんですか！？」

「だつてキモイじゃん？」

矢を上空に飛ばす、その後矢が何百本にもなつてスライムに襲いかかる。まあ、一発当たればスライムくらいなら倒せたんだけどね。でも、キモイじゃん？

「お嬢ちゃんす」「ね……。」「

「キモイのを倒すにはこれくらい必要です。」

「そんなに嫌ですか。」

「もちろん！」「

「……まあお嬢ちゃんが護衛してくれて本当に助かったな。」

「スライムつてそんなに危険何ですか？」

「まあな、全然ダメージが効かないからあまり好んでする人はいないな。」

「ふーん。」

ちなみにスライムを倒したところを通りたらスライムはなんか緑色の液体になっていました。

一日後、俺はまだ馬車に乗っていた……当たり前か。ちなみに夜は黒猫さんが見張っていたおかげで俺の貞操の危機は特になかつた。まあそんな事しそうな人ではなかつたし。

「そろそろ着きますよね?」

「ああ、シイラ村にはそろそろだな。」

「そろそろですか……。」

アリアが緊張した顔をしている。

「ようやく風呂には入れるよー。」

「そこですかー?」

「大丈夫だつて! あなたの両親は分かつてくれるつて!」

『そうそう。』

「もしもの時は実力行使さ!」

「レイさんが言うと軽く村が吹き飛びそうですね……。」

「……なんか分からんが家出でもしてたのか? とりあえず村の入り口が見えてきたぞ。」

見えるのはまだ小さくしかみえないが木の柵で覆われている村が見えている。

「さあ! アリアを巡る戦争だ!」

「何ですかそれ! ?」

『おー。』

『黒猫さんもやる気満々! ?』

俺はアリアの友達だ。アリアがしたいようにするのを手伝つのは当たり前だ。

「……良い友情じゃねえか。」

「ん? 何が?」

「なんか知らんがそこのお嬢ちゃんの為に頑張るんだろ?」

『その通り。』

「いいねえ、青春だねえ。」

ゆつくりとシイラの村が大きく見えてくる。【補助 ホークアイ】で見ると絹のような服を着ている大人が一人、門の入り口に建つていて。二人ともエルフだ。

「あれ? 魔導隊じゃないんだ?」

「ん? ああ、魔導隊は国境付近や首都にしかいないんですよ。数が少ないですから。多分村の大人の人ですよ。」

『つていうかどうやってあそこから人を攫つたんだろう?』

「……確かに。」

「ああ、ヴェルズ帝国の人さらいには変わった魔法を使える奴らがいるらしい。何でも一時的に意識をなくすんだとか。」

「商人さん詳しいですね。」

「こうやって物を運んでいれば色々と情報が聞けるのや。」

『ふーん。』

正直黒猫さんはそんなに興味がないようだ。ゆつくりと近づくと、エルフの人が近づいてきた。大人といつても見た目は20歳くらいにしか見えない。これは「マジック・ティル」の公式設定でも書かれていたが20歳まではヒューマンと同じように普通に歳を取るがそれ以降はかなりゆっくり成長し寿命は200歳くらいあるそうだ。

「よつウイナ。首都に行く途中か?」

「ん? まあな。 後お密様もいてな。」

あ、商人さんの名前はウイナって言つんだ。 初めて知った。

「お密様? その隣にいる一人の少女……ってアリアじゃないか!」「どうも。お久しぶりです。」

「戦争をしにきました。」

「は?」

「レイさん、言ひことがおかしいです。」

とりあえず村人に事情を説明した。

「う~ん、アイウス神父が納得してくれるかね~。」「……やっぱり厳しいですよね。」

「ああ、あいつは娘に甘いが危険なことはさせたくないって奴だからな。」

「ああ、頑固親父か。」

「まあ、そんなもんだ元々旅をさせるつてなれば大抵の親は反対するさ。」

「……やっぱり実力行使しかないかな~。」

「とりあえず父さんに会つて説得ですかね。」

「まあ、がんばりなお嬢ちゃん達。」

「ええ、お世話になりました。」

商人さんと柵のところで別れる。

「そうだ! ウイナ。」

「何だ?」

「今、ヒューマンの個人ギルドの人達が泊まってる。 もしかしたら売れるかもしねえぞ。」

「ホントか？ ありがとう！」

個人ギルドとは依頼などを受けることが出来る冒険者ギルドとは違い。個人で集まって冒険者ギルドの依頼などを受ける人達の集まりだ。「マジック・テイル」でも個人ギルドを作り、みんなで国同士の戦争に参加したり。城や家などを拠点にし、みんなで集まつたりすることも出来る。時には拠点を襲撃されることもあるため防衛したり……といった事が出来る。

「なんて名前のギルドですか？」

「ああ、狼の集いだつたかな？ オルアナ王国ではそこそこ有名らしいな。」

「へえ……あれ？ どうしてオルアナ王国の冒険者がハイナ教國に居るの？」

「一応冒険者ギルドはオルアナ王国とハイナ教國の一緒のギルドなんですよ。」

「ええ、何でも国の政策には従わないで民の為に働くとか。

「いい心がけだね。」

「そろそろ行きましょうかレイさん。」

「そうだね。」

「頑張ってアイウス神父の頭を柔らくしてくれよ。」

「頑張つてみま～す。」

村の方へ二人と一匹で歩く。さあ、戦争だ！……流石に実力行使は避けたいけどね。

追記 そういうえばアリアの父親アイウスって言つんだ。初めて知つたよ。

第10話 シイラ村での出来事

村の建物は殆どが木製で出来ている。……「うん、村だ何もない普通の村だ。 村の人は皆アリアを見かけるとみんなやつてきた。

「あれ？ アリアちゃんんじゃないか！ 何処に行つてたんだい！ みんな探したんだよ！」

「……すみません迷惑を掛けました。」

「いや！ 無事ならいいんだよ。」

「あ！ アリア！ 何処に居たの！？」

「レイス！ 「ごめん心配掛けちゃって。」

「……ううん。 村じやあ人さらにに攫われたんじゃないかつて言われたから。 大丈夫だつたんだね。」

「うん、レイさんに助けられたから。」

「へえ、ありがとうござります！ あなたのおかげで私の親友を助けてくれて。」

「ふつふつん、どうしまして。 あなたはアリアの友達？」

「は、はい！ レイです。」

「アリア、いい友達いるじゃない。」

「ま、まあいますよ。」

アリアは慕われているんだなあつと俺はこの光景を見て思う。それでもアリアは外に出たいと思つた。まあこんなに小さな村に14年もいれば外に出たいと思つのも当然か。

「あ、私の家はそこです。」

「おお～、本当に教会なんだね。」

「そりゃあ、神父の娘ですから。」

村の中に一つだけレンガ造りの教会が建つていて。これだけ雰囲気が他の建物と違う。中々高級そうだ。

「ハイナ教の教会は国が建てるんですよ。」「そこにアリアは住んでいるの？」
「はい、そうです。」「じゃあ、あそこが戦場か！」「だから実力行使は最後ですよ。」「最後ならいんだ！」

なんだかんだと会話しながら教会の扉に辿り着く。

「中でお祈りとかしてると可能性はないの？」「お祈りをしてるときは見張りの人以外はみんな教会にお祈りに行きますから。大丈夫ですよ。」「ふーん。」

本当に熱心な信者が多いんだなあ日本とは大違いだと関心しているとアリアが扉をノックしてから開ける。

「お父さん？居ますか？」「アリア！無事だったの！？」

アリアが教会に入ると黒髪が腰に着くくらいの長さでややウェーブがかかっている。胸は結構大きいな……アリアの将来が期待できる。アリアはとりあえず今までのいきさつを伝えているようだ。

「とりあえず帰つてきてくれてよかつたわ……もう何処にも行かないわよね？」「え、えへっと。」

「ふつふうん。アリアは私と冒険をするのだ。」

「は？」

「……レイさんもつと分かりやすく説明を。」

「そちら辺はアリアが説明してよ。」

「なら口を挟まないでください。」

「……すみません。」

『これはレイが悪い。』

黒猫さんにも言われてしまった……。がっくりと俺はつんだれる。

「旅に出る！？ そんなのダメよ！」

「一人ではないから大丈夫だつてばお母さん。」

「ダメよ！ あなたは大事な娘なのよ。」

「ですがずっとこの小さな村に閉じ込めておくつもりですか！」

『小さな村言っちゃうんだ。』

「変なところで関心してないの。 大丈夫ですよ私がいますから。だから心配なの！ たかが人さらいから娘を助けたくらいであなたみたいな小娘一人で信頼できると思つてているのですか！？」

「ちょ、ちょっとお母さんその人は……。」

「信頼できるか証拠が欲しいという事ですね？」

『……レイ？』

「レイ……さん？」

「そ、そうね信頼に値すれば考えてあげてもいいわよ？」

「じゃあ明日朝に誰か相手を用意してください。決闘で決めましょ。」

「そうね……いいわ。夜にお父さんと相談するから。アリアは

今日は教会に泊まりなさいね。」

「……はい。すみませんレイさん。」

「分かったわアリア。」

いつたん別れて黒猫さんと教会を出る。そして宿を一人と一匹で探すこととした。

「そういえば【補助 変身】って使えるのよね？」

『ん？ まあ出来るよ。』

「やつてみてくれない？」

『……まあ、いいけど。』

そういうと黒猫さんの体が白く光り出す。あまりのまぶしさに俺は目をつむってしまった。しまった！ 変身シーンとかあつたんじゃないのか！？

「何で目を閉じているの？」

「ん？ うわあ！ かわいい！」

目を開けたらそこには黒いコートを着たヒューマンの女の子がいた。髪はどちらかというと白に近い色の灰色。身長はアリアよりも小さい位。胸はぺったんこだ。

「……失礼な事考えてない？」

「い、いいえ何も？」

「考えていたでしょ。」

「……と、とりあえず宿を探そう！」

「……逃げた。」

黒猫さんが猫の体に戻る。理由を聞いたら『宿代が一人分で済むでしょ？』とのこと。中々考えているようだ。村人に聞きながら宿屋を見つける。一階建ての木造の家だ。俺は中に宿屋の中に入る。中にはエルフの女性が一人……多分この宿の女将なの

だろう。

「中々かわいいお嬢ちゃんと……黒猫？冒険者かい？」

「はい、こっちのは私の使い魔です。」

「へえー、使い魔かい。」

『その通り。』

「おっ喋るのかい。なかなか面白いねえお嬢ちゃん達は。」

「ところで泊まるときは。」

「ああ、一人分でいいよ。」

「ありがとうございます。」

「あつ、でも今は狼の集いつていうギルドが来ているから一応氣をつけておいてくれよ。」

「何で？」

「正直言つて。偉そうにして困つてるんだよ。まあ刺激し

ないようにって事だ。」

「はい、分かりました。」

お金払い中に入る。一階は食堂になつていて一階が密室らしい。女将に誘われて二階に行く。

「ん？ 女将さん？ 何だそのお嬢ちゃんは。」

一階の廊下でこきなりヒューマンの男達にからまれました。

「ああ、お嬢さんだよ。」

「客？ とこり」とは村人じやあねえんだな。」

「ああ、冒険者らしこよ。」

「冒険者？ んな馬鹿な！？」

男達がいきなり笑いまくる。正直いますぐ全員を【魔法 エク

スプロード】で炭にしたいが耐えて、質問する。

「何がおかしいんですか？」

「だつてお嬢ちゃん一人だろ？ 一体何で戦つんだよ？ 魔法か？

一人で使う魔法なんてたかがしれてるぜ。」

「そうそう、お嬢ちゃんみたいな世間知らずが冒険者名乗つたら俺たちの名が落ちちまつば。」

そうだそだと言ひながら男達が去る。 苦い顔をした女将が俺に話しかける。

「すまないね、気分を悪くしたかい？」

「いいえ、大丈夫です。」

女将に部屋を案内されてからはすぐ風呂に入り、明日の作戦を黒猫さんと考えていたが途中から黒猫さんの着せ替えショ―になつていたのは気にしない事にしよう。

視点変更 レイ アリア

「……で、アリアお前の気持ちは変わらないんだな。」

「はい、私は自分の目で外の世界をみたいと思います。」

夜、教会でお父さんとお母さんと一緒に夕食を食べる。 正直、この一人よりもレイさんと居る方が何かと気が楽に思えてしまう。 たつた四日間しか一緒にいないのにおかしな事だ。 まあ、なんか私が勝手に特別視しているのだが。

「どうか言ってよーあなた！」

「……まあ、お前の言うレイという子が決闘を申し込んできたのだ

ろう？俺たちが用意した対戦相手と闘えばアリアの事は諦めるのだから強い相手を用意すればいいじゃないか。

「誰を相手に出すつもりですか？お父さん。」

「今、狼の集いというギルドの者達が泊まっているだろ？そこにはギルドマスターがいてな。」

「まさか！？」

「そのまさかだよアリア。ギルドマスターが直接闘ってくれるよう頼んだ。あのような20歳にも満たない少女にギルドマスターと闘わせれば流石に諦めてくれるだろ？」

「大丈夫かな……。」

「流石に少女相手だ手加減はしてくれるだろ。」

「いや、そのギルドマスターの人。」

「はっ？」

「いえ、何でもありません。」

「まあ、レイという娘が負ければこの村に残つてくれるのですよね？」

「ええちやんと言いましたよ。そこは守ります。」

その後、一人で風呂に入り。レイさんに少しの不安を思いつつもベットで寝た。

なんだかんだ言ってレイさんが勝つとしか私には思えなかつた。

第1-1話　これ一決闘！（前書き）

まじめな戦闘描写は初めてですね。
うへん、いまいちな出来……。

第1-1話 いざ一決闘！

視点変更 アリア レイ

光の眩しさに目を開ける。 そういえばずっと馬車の上で寝てたからベットで寝るのは久しぶりだな。 そういえば前に宿屋に泊まつた時は隣にアリアが寝ていたんだっけ。 あれは驚いたなーっと昔を思い出しつつも隣を見ると黒猫さんが人型で何故か寝ていた。

……ん？ 昨日の夜は何があつたんだっけ？ 確か夜どんな武器で鬪おうかという話で盛り上がり。 途中から黒猫さんの服を替えられないかと俺が考えて黒猫さんの着せ替えショートになつて……あ、ここからおかしくなつてるな。 とりあえず黒猫さんを起こそうと体を揺すつて起こす。

「ん……？」
「起きるー朝だぞー。」

少し揺すつたらすぐに目を覚ました。 そして目をこすりながら起きる。 中々かわいいな……と考えていたが体を起こしたことでの彼女にかかっていたシーツが落ちたときに恐ろしい事に気がついた。 服を着ていない……だと！ こんなことは体育の授業の時に体操着に着替える時に男子生徒から鼻血を出されたときくらいの衝撃だ！ アリアの肌は真っ白でずっと光一つ届かない部屋に居たかのように真っ白で下は説明はしないぞ……うん。

「んー後5分。」「そんなこと言つてないで！ 服を着て！」

襲いたくなつちゃうじゃないか。

「分かつた……。」

黒猫さんがモゾモゾとベットから出ると。最初に着ていた黒い
「コードを着始める。

ちなみに女将曰く「決闘は昼、村の中心の広場でするって言つて
たよ。」と言つていた。何故場所が分かつたんだろうって聞いた
ら。ここしか宿屋がないからじゃない?とのこと。そりいえば
時間とか決めてなかつたな……。

「レイは着替えないの?」

「え?ああ。 そうだね、まだパジャマだね。」

ネタ装備のパジャマに着替えて寝てたため、服を着替える。着
る服は今回も変わらず聖女のワンピースを着る。

「よし!朝食に行こ!」

『うん。』

「あれ? 黒猫さんになつちやつのは?」

『一人分で部屋は取つたんだよ?』

「あ、そつか。」

『それに食費も浮くよ?』

「いや、そんなにお金では困つてないから。」

黒猫さん中々節約家だな。一階に降りて食堂にやつてきた。
食堂は丸い机と椅子がいくつかある感じのレトロなRPGでありそ
うな感じの食堂だ。そこには女将が料理をしていたが俺に気付き
挨拶をする。

「おはようーよく起れたかい?」

「はい！ とつても眠れました。」

『同意。』

「そうかい、それはよかつた。…… そいつえば聞いたかい？」

『何を？』

「決闘の話は私も聞いてるんだけど。 相手は狼の集いのギルドマスターらしいんだよ。」

「へえー。 その人は強いんですか？」

「ああ、大剣士のヒューマンだよ。 ここに泊まっているから顔も知ってる。」

「大剣士……。」

大剣士は剣士の上位職に当たる職業だ素早さと回避能力が低い代わりに物理攻撃力と物理防御力がかなり高い。 この職業は一撃が強いが隙も多いかなり扱いづらい職業で、剣士の上位職で別の魔法剣士と双剣士に転職する人が多かつた覚えがある。

「まあ、相手が何であれ闘うんだろう？」

「はい！ もちろんです！」

「アリアの為なんだろ？ がんばりなよ！」

「あれ？ アリアを連れて行くな」とかじやないんですか？」

「まあ、旅に出たら心配だけど。 アリアは生まれてからずつこの村に暮してんだ。 父親や母親が首都に行くときもな。 少し外を見させた方がいいのさアリアには。」

『アリアと知り合いなの？』

「まあ、村の人は皆家族みたいな者さ。」

「いい村ですね。」

「まあね。 さあ決闘のために朝食を食べなー。 何か食べなくちゃ

力は出ないよ！」

「はあーい。」

『キャットフードは？』

「ないから」主人様から分けてもらいたいな。」「……はい。』

ちなみに料理は卵焼きとパンらしき物とキャベツのサラダという普通の朝食でした。

「そういえば狼の集いの人達は?」「朝、外に出たのが何人かいたな。それ以外は皆寝てるんじゃ無いかな。」「ふう〜ん。」

「あんたはこれからどうするんだい?」「とりあえず部屋で武器を準備しておきます。」「へえ〜。なかなか面白そうじやないか。」「瞬殺するからみててくださいよ!」「そ、そうかい。」

あ、苦笑いしてる。その後黒猫さんと一緒に部屋に戻った。

「黒猫さんは鬪うの?」「あなたはどう思う?」「私としては一人で徹底的にフルボッコがいいんだけど……。」「じゃあ、それでいいじゃない。」「それもそうだね! 後衛職でボッコボコにされるギルドマスターとか見物だよね!」「意外と恐ろしい事考へているね。』

昨日罵倒してきた狼の集いの奴らの驚く顔が目に浮かぶぜ!

まあ、武器とかを黒猫さんと決めていたらいつのまにか昼になつてないので手に黒いケースを持って女将付き添われ、広場に向かう。ケースの中には自分の武器を入れてある。流石に大勢の前でアイテムボックスを出すわけにはいかないしね。広場には大量の人で溢れていた。こんなに人がいたのかこの村には。

「うわあ、ギャラリーがいっぱいだね。」

「まあ、何にもない村だからね。こんなイベントがあれば皆見に来るさ。」

『暇なんだね。』

「まあ、そうだね。」

何人かの人が気づいてこっちに声を掛けてくる。

「がんばりなお嬢ちゃん!」

「あの頑固親父の頭を柔らかくしてくれよ!」

「ギルドマスターにやられちまえ!」

「つーかあんな小娘の為にギルドマスターが出るのかよ。」

……なんか色々と言われているが全てスルーを決め込むことにして広場の中央に進む。広場の中央には身長180を軽く越えてそうな大男が立っていた。髪は黒く肌は茶色氣味見た目30歳くらい……かな? そして手に持っているのはその身長よりも大きい大剣……見た目からして鉄製だと思つ。広場の中央には流石には大男しかいないがギャラリーの中にはアリアとアリアの母親、そして神父のような格好をした男が居た。多分アリアの父親だろう。ギャラリーを見回していると大男が話しかけてきた。

「お主がレイか?」

「ええ、そうよ。」

「このような小娘相手に私が雇われるとは……なめているのか？アイウス。」

「なめてなどいません。 その少女はこう見えても盗賊を一人で倒すくらいの実力はあります。」

「ほう。」

アリアの父親のアイウスと会話をしているギルドマスターらしき人に話しかける。

「あなた、名前くらい名乗つたら？」

「ルルダンだ狼の集いのギルドマスターをしている。」

「ルルダン……愉快そうな名前ね。」

「なめているのか？」

「いいえ。」

ルルダンが睨み付けてくる。 おお怖い怖い。

「武器は構えないのかな？」

「大丈夫ですよ。 ここに用意してあるから。」

黒いケースを地面に置き中から武器を取り出す。 それを見て村人の一人が呟く。

「……ヴァイオリン？」

「ええ、そうですよ。 ヴァイオリンです。」

「そんな武器で大丈夫なのか？ 手加減はせぬぞ。」

「大丈夫です。 あなたも死なないよう踊りなさい。」

風がやむ。 僕はヴァイロンを手に挟み構える。 ルルダンも

ゆっくり大剣を持ち上げる。何も知らない人が見たら何が起こるのかサッパリ分からぬだろう。

俺は素早く弓を使い音を出す。その瞬間ルルダンがこちらに走り出す。

「今だ！」

ルルダンが剣を振るうがその攻撃は見えない壁によつて阻まれる。

「あの小娘！ 一体何を！」
「小娘の周りの白い球体は何だ！？」
「……まさかもう魔法を発動したのか！」
「早すぎる！ 一人で出来る魔法じゃねえ！」

ギルドの人達が戸惑う中アリアは「流石ですね……。」と感嘆しているのが聞こえるが今は闘いに集中する。

ヴァイオリンなどの楽器を使う職業がある。精霊術士といいエルフ専用の職業なのが不人気な職業ナンバー1といつても過言ではない。この職業はMPを使わないでも【魔法】を使え一人で攻撃、回復、ステータスUP等の様々な【魔法】が使える反面周りに武器を使って精靈を集めなければならないという弱点がある。しかも精靈を集めるのが恐ろしく大変なのだ。森の中なら精靈は結構早く集まるが、草原では森よりも遅くなり、砂漠や火山に行けばかなり精靈が集めにくくなる。つまり場所によっては全然役に立たない職業である。ちなみに精靈が集まると周りに白い球体が現れる。そして、ルルダンからの攻撃を守ったのは【魔法 精霊術】の盾である。上位職には火山などで精靈の代わりに悪霊を集める悪霊術士と光魔法が中心の聖霊術士がある。

「さあ、攻めますよ。【魔法 精霊の砲撃】」

「クソッ！」

【魔法 精靈の砲撃】は白い球体がビームを勝手に撃つてくると
いう支援魔法だ。精靈術士でソロで戦うには必要不可欠の魔法だ。
ルルダンは白い球体からのビームに気を回さなければいけなくな
つている。

「こっちからも攻撃はしますよ。【魔法 精靈撃】
「なっ！？ぐふつ！」

ヴァイオリンから放たれた光の熱線によってルルダンが吹っ飛ぶ
……やり過ぎたかな？ とは思ったが氣絶しているだけだから大丈
夫だろう。
ギャラリーが呆然としている。そしてアリアがポツリと言葉を
こぼした。

「これって、勝ちって事ですか？」
「うーん、そうじゃないかな？ 多分。」

意外にも呆氣なく決闘は終わってしまったのであった。

第1-2話 少し動いた世界とある男は物思つ

「嘘だる……ギルドマスターが……。」

「こんなにあつさり……。」

「ありえねえ……。」

狼の集いの人達が呆然としながら咳く。俺はその人達を見ながらスカツとしつつも、アリアの父親アイウスさんだったかな？に話しかける。

「約束は守つてくださいね？」

「ああ、約束は守ろう。アリア、聞いてくれ。」

「はい？」

「外は広いし危険だ。それは分かっているな？」

「はい。」

「世界には様々な危険がある。モンスターだけではない。人さらいのような悪い人も居る。それでもお前は見たいのか？」

「ええ、もちろん。」

「ならば見に行くが良い。世界は広い。その世界をよく見てこの村に帰つてこい。」

「お父さん……はい！」

アリアの父さんが名前っぽいことを言ひ。妻にさざざん言われる俺の父親とは段違いだぜ。

「意外といいお父さんだね。」

「レイさん……はい、意外といいお父さんでした！」

「意外とつて……。」

あ、アリアのお父さんはガックリと頃垂れているのをアリアのお母さんや村人が励ましている。中々面白い光景だ。

「じゃあ、もう出発しましょうか。」

「ん？ もう行くの？」

「はい、ずっと居たらついにずっと居そ�ですから。」

『そんなものなの？』

「私には分からぬわ～。」

「……意外と淡泊なんですね。」

「まあ、色々あつたからね～。」

「一人とも。」

いきなり異世界に来てここまで冷静なんだから意外と淡泊なかもしれないな。よく思つたら元居た世界はどうなつているのだろうか？「衝撃！オンラインゲームで死んだー！」って感じにニュースになつてたらやだなあ……。

「レイさん？」

「あ、うーんじゃあ行こうか。」

『おー。』

「アリアちゃんと帰つてくるんだぞ。」

「はい！お父さん行つてきます！」

「ああ、行つてらっしゃい。」

親と子の感動の場面であるが、くうーっと言つ小さな音が俺の腹から聞こえてきた。

「あ、昼食を食べてから行こう。」

「何かと台無しですね……。」

食事は大事だよ！

視点変更 レイ レオーナ

ハイナ教国で出来た魔法で瞬間移動の魔法が最近オルアナ王国に普及してきて比較的短時間で移動が可能になった。 その分MPを大量に消費してしまうため首都からループの町までに魔法使い6人のMPが必要という弱点もあるが便利な魔法だ。

町に戻つてからは騎士達によるモンスターの搜索が続いている。もう三日はたつているが何処にもいない。 今ここ国境で待機している騎士達は皆疲れが出始めている。

「団長…… やっぱり王を説得して搜索を打ち切つた方が……。」「だが王は一度言い始めたら止まらないからな。」

「ああ、かなり困るな……。」

正直王の命令なので断ることが出来ないし、あの王は他人の意見を全然聞かない。 それでも部下からは愚痴の内容は大体こんな感じだ。 私も打ち切つた方が良いとは思う。 町や村がペガサスに襲われたという報告は受けていなし、伝説のモンスターに騎士だけで勝てるとは全然思わない。 つまり様子見がいいという感じだ。

「とりあえず王が招集するまでずっとこれだろ?」

「そんなく団長~。」

「仕方が無いだろ?……。 あの王は種族に対しても平等だが地位に関しては差別をする人だ騎士団長だって自分の駒としか考えない。」

「やっぱ前代の王のほうがマシだな~。」

「……そこは同意しよう。」

前代…… つまり二代目の王様は種族の差別が少なからずあつた才

ルアナ王国を一代だけで差別を大きく減らした王だった。ドワーフが宿屋に泊まろうとしたところヒューマンであつた宿屋の主が泊まるのを断つたという事件を王様が耳にしたとき王様自らが宿屋に行き宿屋の主を捕らえ牢屋に送りにしたというのは有名な話だ。それ以外にもオルアナ王国の為に活躍した人は種族が何であれ褒め称え、報酬を渡し、人によつてはエルフだろうとドワーフだろうと貴族の地位を渡したというのもある。

三代目の王は自分の事よりもオルアナ王国の国民の為に政治をした偉大な王だったと言われ四代目の王とはよく比べられる。

「だ、団長！？」
「何だ！？」

通信兵の騎士が急いで私に話しかけてきた。その様子からなにやら大変な事が起きたことは明白だが何だろつか。

「ヴェ、ヴェルズ帝国が宣戦布告をしてきました！」
「何！？」

宣戦布告……つまりオルアナ王国とヴェルズ帝国が戦争をするといつこと。

「団長は急いで首都に戻つて作戦会議をし、他の部隊はモンスターの搜索に当たれとのこと。」

「モンスターとのことまだ諦めてないのかよ……。」

部下の一人が呟く。

「まあそういうな。私は転送魔法を使って首都に行く。」このことは頼む。」

「了解しました。」

俺は急ぎ足で転送魔法専用の部屋に向かった。

視点変更 レオーナ 彰

アイツが行方不明になつて五日がたつた。 五日前、午前九時頃アイツの母親が中々起きてこないので見に行つたらいつのまにか居なかつたらしい。 アイツの妹曰く午前一時頃お手洗いに行つたときは部屋から明かりが見えたらしい。 俺も「マジック・テイル」でアイツと午前二時頃まで一緒にクエストを受けていたので知つている。

アイツとは中学一年の頃からの友人だつた。 中学一年の頃にアイツを誘つて テストを受けたMMORPG。 それが「マジック・テイル」だつた。 アイツはMMORPGをやつたのは初めてだつたらしがアイツはドップリハマつた。 アイツはあの頃クラスメイトの男子からのイジメに悩んでいたので「気持ちを切り替えるのにやつたら?」と俺は誘つたのだ。

まあ、なんだかんだと言つたがハッキリ言うとアイツは何処に行つだらうか不思議に思う。 こうやって冷静に思つてはいるが、いつもはもつと馬鹿やつていてる男だ。 高校のクラスメイトからはアイツがいなつたからと分かつていて気を遣つてくれている。 本当に何処にいつてしまつたのだろうか。 ちまたの噂では「マジック・テイル」の異世界に行つたなどとも言われている。 色々と考えつつも教室の窓から空を眺めて思つ。

アイツ……白崎

陸は何処に行つたのだろうか？

第1-3話 村から出発！ そして女H様の楽しみ（前書き）

お久しぶりです。
久々の投稿です。

第1-3話 村から出発！ そして女王様の楽しみ

視点変更 彰 レイ

決闘の次の日、俺たちはまだシイラ村にいた。

「なんだかんだ言って一日こちやつたね。」

「主にレイさんのせいですよ。」

『子供と遊んだし楽しかった。』

昼食を食べた後、子供達と鬼ごっこやらかくれんぼやらをして村の子供に誘われそのまま家に行き夕食を食べ、泊まってしまった。ちなみに狼の集いのルルダンという男は回復魔法を使って治療をして、ギルドの人達に渡したが狼の集いの人達に怯えられてしまつた……あきらかにお前ら年上だろ、何年下の少女にびびつてんだよ一応冒険者でしょ。

「で、アリア今度こそ行くんだね？」

「あ、お父さん。行ってきます！」

「ああ、行つてらっしゃい。」

そして今度こそ別れて二人と一緒にハイナ教国首都に向かうのであつた……商人さんの馬車に乗つて。

「すみませんウイナさん。」

「まあいいが……。」

みなさんは覚えているだろうか？ ハイナ教国からシイラ村に来るまでに乗つてきた馬車に乗せてもらった商人さんだ。 シイラ村

に来たときにウイナつていう名前だと判明した人だ、言つていなかつたがヒューマンである。

「狼の集いのギルドマスターをあんなにアツサリ倒せるよつな人を無料で雇えるんならこつちも万々歳だ。」

「ふふ～ん、私は凄いんだよ～。」

「ああ、今なら正直にそう思つよ。」

「レイさんですかね。」

『だよね～。』

二人と一匹が俺に対してなんか暖かい目を向けてくる。

「何せ！みんなして普通に褒めて！」

「いやあ……レイさんは凄いひとだなあ～って。」

「ああお嬢ちゃんは凄い人だ。」

『うんうん。』

「なんか普通に褒められると不思議な気持ちに……。」

やつぱボケ担当なのかな……俺。

視点変更 レイ ハイナ2世

「女王様！」

「ん？ 何ですか？」

私は、首都の孤児院に見舞いに行つた後、宮殿に戻つてきたとき女官に呼び止められた。私は、正直机に座つているよりも歩き回つて民の声を聞く方が好きだ。母上は最初は傷ついた人の為に治療をずっとしつづけていたら、いつのまにか人々の中心になつて

いて自然に村となり、国が出来たのがハイナ教国であり。母上が言つた掟や思想などがハイナ教の聖書になつと私は母上から聞いてきた。

「そ、その国境の魔導隊の人達からの報告書が届いたのですが……。

「緊急の問題ですか？ それとも伝聞機に不備があつたのですか？」

伝聞機……最近出来た魔力で動く道具であり、伝聞機から遠くの伝聞機まで文字を届けることが出来るという道具であり、今は試作品が国境付近に配備されている。まあ、急ぎの用事にしか使われないのですが……。

「いえ……伝聞機には問題がないらしいのですが。 国境を通ったエルフ種の人によると少し変わつた人がいるらしいのです。」「変わつた人？」

「はい……魔導隊の人によるとハイエルフなんだとか。「まあ……ハイエルフなのですか！」

ハイエルフ……今じゃ私だけになつてしまつたと思つていた種族。母上からの遺伝でハイエルフになつたのだが私以外にはいないといつのにやら抵抗を感じた。 だが私と同種の人まだこの大陸に居るということに少しうれしくなつてしまふ。

「その人は今何処にいるか分かりますか？ 話をしてみたいのですか……。」「すみません……そこら辺はわからないそうです。」「そうですか……。」

その人はどんな人なのかとても気になつていたのだが居場所が分

からないといつ事にやや落ち込む。その人と少しお話したかった……。

「そ、そんなに落ち込まないでください！女王様！ とりあえずそのハイエルフの人を探すように国全土の教会に通達してみます！」
「ありがとうございます。よろしくお願ひしますね。」
「はい！おまかせください女王様！」

今は会えないのはしょうがない。その名も知らないハイエルフの人の事を考えながらも仕事をするために椅子に座るのであつた。

視点変更 ハイナ2世 レイ

「ツー？クシユン！」
『どうしたの？風邪でもひいた？』
「いや……誰か噂してるのかな？」
『？』
「そうだ……風邪といえば状態異常 病つて何か分かる？」
「えつ？」

なんかアリアアが「えつ、この人何言つてるの？」という感じの目を向けてくる。

「状態異常 病は様々な物があるんですよ。例えば体力が徐々に減つたり体が痛くて動けなくなつたりとか……基本的には時間がたてば自然に治りますけど、治りやすいものもあれば治りにくい物もあるんですよ。」
「病気つて事？」
「まあ、そうです。」
「あ～なるほど。」

つまりループの町ではとりあえず病気を魔法で治したって事か。
なるほど。

「ハイナ教国は南の方の国なんだよね？」

「はい、大陸では西南の方に位置しますね。」「オルアナ王国は真西に、ヴェルズ帝国は北西に位置しています。」

「見事にみんな西なんだね~。」

「でもライヴァン同盟は南東の方にあるんですよ。鉱山があるとか何とか。」

「真ん中には国は無いんだね。」

「真ん中は大平原つていうんですけど、平原の主つていうモンスターが居て平原中を駆け回っているそうで、町なんかを作つたら平原の主に荒らされるそうです。」

「ふーん。平原の主ねえ。」

「どうしたんですか？」「どうしたんですか？」

「……捕獲できるかなあ。」「……お嬢ちゃん本気かい？」

「とりあえずペガサスとスレイプールと朱雀を出せばいけますかね？」

『私もいるよー』

「そうだ黒猫さんが居た！」

「なんで言い伝えにしか出てこないようなモンスターばっか……。」「……お嬢ちゃんは本当に何者なんだい……。」

なんかウイナさんがガクブルしている。ってそつかスレイプールがいるのか。

「そうだ！スレイプールに乗ればすぐに首都に行けるじゃん！」「だからそれは却下です！」

『個人的には楽しそう。』

「黒猫さんもですか！」

「……若いつてのは本当に良いねえ～。」

馬車はゆっくつと首都へ走っていくのであった。

第14話 お礼とかつて大事だよ？ロソレイ

五日後、道中ではスライムの群れが出てきたのを【魔法 ファイアキヤノン】で焼き尽くしたり、盗賊が俺の召喚したナイトウルフに襲われて涙目で逃げ回ったりといったことがあつたら比較的安全に進んだ。

「そろそろだな。」

「首都ですか？」

「ああ、首都ハイルズだ！ あの町はとても大きいからなきっとお嬢ちゃん達も驚くぞ！ 首都に来るのは初めてらしいからな。」

「はい！ 初めてです！」

「どんな町なんだろうね～。」

『キヤットフードはあるの？』

「キヤットフードにこだわってるね……黒猫さん。」

普通の猫ならキヤットフードよりも人間の食事を好みそうだが、ちなみに俺の家で飼っていた犬はドッグフードよりもテーブルから落ちてきた食べ物の方が好きだった。

木々に囲まれている道を馬車でゆっくりと歩く。

「けどこの国つて首都の近くなのに木が多すぎじゃない？」

「エルフは元々森の中で暮らす種族ですから。後、周りに森があれば精霊とも会話しやすいですから。」

「ああ、そつかあ。」

「それに、森の中ならエルフの独壇場だからな。森の中ならヒューマンじゃあ相手にならねえ。」

「まあ、精霊に相手の場所を聞きながら戦うからね。」

『つまり周りが木が多い方がエルフの為になるからっていつに?』
「エルフの国だからね。」

皆には、赤い服を着たエルフの人達……魔導隊の人達だ。しかしエルフの人つてみんな若いな。シイラ村にもおじいさんおばあさんは居なかつたしレオーナとかいう騎士団長も見た目は若かつた。

「検問だ。」

「ああ、いいぞ。ライヴァン同盟から武器を運んできた。」

「ふむ、確認しよう……その子達は?」

「ああ、その子は「レイです!女王様に会うにはどうしたらいいですか?」ってオイ!」

ん?なんか普通に聞いたはずなのにウイナさんと魔導隊の人人がポカンとしてるぞ?アリアは呆れたような表情をしている。黒猫さんは特に表情は変わつてない……猫の表情って何かよく知らんけど。

「どうしたの?ウイナさんそんなに大声出して。」

「大聲出すわ! いきなりどんな事聞いてんだよ!」

「だつて会いたかったし……。」

「そんなんに簡単に会えるわけないじゃないですかレイさん。」

「やっぱ手続きとか必要なのかな?」

『人間は面倒臭いね。』

「えつと……確認出来ましたよ。」

『やあやあやあと騒いでいると苦笑いしながら魔導隊の男が話しかけてきた。

「ああ、ありがとう。」

「はい、どういたしまして。……あとそこのお嬢さん?」

「私?」

「はい、女王様に会いたいんですね?」

「まあね。」

「なんでそんなに誇ってるんですか……。」

俺が胸を張つて答えるとアリアがやや呆れた表情で答える。ちなみに胸が大きくてワンピースなので胸がかなり強調されているのに気づくのはまだ先だった……。

「ま、まあお嬢さんは女王様に会いたいんだろう?」

「?何で顔を赤くしてるの?」

「な、何でも無い。」

魔導隊の男の人が顔を赤くしているが風邪気味なのだろうか?
魔導隊の人を心配してると別の魔導隊の人が話しかけてきた。

「今度、ハイナ教国で冒険者限定の闘技大会があるんだ。ここで優勝できれば賞金と女王に直に会えるぜ。お嬢さんに実力があれば出でみれば良いんじゃ無いか? それ以外じゃあお偉いさんしか女王様には会えないぜ。」

『それって使い魔とかあり?』

『その黒猫は使い魔か! 使い魔ならありな筈だぜ。』

『ありがとうございます!』

『っていうかお嬢さん首都に来るのは初めてか? エルフは特に検問とかないけどエルフ以外の種族はスリとかする奴がいるから気をつけろよ。』

『はい!』

スリねえ……。スリといえば「マジック・テイル」の職業では種族によつてはなれない職業がある。エルフなら盗賊にならず、ハンマーなどを使って戦う鍛冶職人という職業にもなれない。「エルフ以外」というのはエルフは盗賊にはなれないからスリたはないといつ事なのだわ。

「まあ、ようこそハイルズへ！」

「おう！ でお嬢ちゃん達とはここでお別れか？」

「まあ、そういうことだね。まあ、送つてくれたお礼とかした方が良いよね？」

「まあ、大事ですよねそういうの。」

「別にそういうの求めてねえしいよ。」

「いいえウイナさん！ これは重要です！ 相手に貸しを作つてしまいます！」

俺は、とりあえず白金貨一枚ウイナさんに渡す。それを見てウイナさんが笑顔のまま固まつた。あれ、おかしい事したかな？

「どうしたのウイナさん？ 口の中に虫が入つかけやつよ？」

「どういう警告ですか……。」

『けど気持ち悪い笑顔だなあ。』

「黒猫さん！ 確かに思つたけど言つちゃダメー！」

「思つたんですかー？」

やつぱりおっさんの笑顔よりはかわいい女の子笑顔だよなーつと思つてゐると意識を取り戻したウイナさんが慌てて俺に聞いてくる。

「おい！ これつて白金貨じゃねえか！」

「うだけど？」

「いや、うだけどじやねえし……これが何Gか知らないのかよー。」

「何Gつて……確かに100万だっけ？」

「そうですよ。100万Gです。」

『もしかしてもっと欲しいの?』

「いや!…多すぎるだろ! 国同士の貿易でしか見れないような代物だぞ!」

「まあまあお礼なんだからもらつてもらつて…」

「いや……流石に多いと思いますけど。」

ウイナさんが受け取らないなあ……アリアも「そりや受け取る人は居ないよ。」っていう目で見てくるので俺はウイナさんに金貨一枚を渡す。

「いやいやこれでも多「いい加減もらわないと魔法を擊つよ?」…喜んでもらいます!」

ふむ、ちゃんとお礼をもらつてくれた。お礼はちゃんとしないとね。俺が満足してると闘技大会の説明をした魔導隊の人があれに話しかけてきた。

「そうだ!お嬢ちゃんその闘技大会冒険者しか出場できないが冒険者なのか?」

「え、マジで?」

「そりゃあ冒険者限定って言つてたじゃないですか……。」

「……なら冒険者に登録しなくちゃいけないか~。」

冒険者……つといつことは仕事とかしなくちゃいけないのかな? 働きたくないでござる。

「……ねえねえ 親切な魔導隊の人?」

「ん? 何だ?」

「女王様つて美人なの？」

「まあ、美人だなハイナ教国一じゃねーか？」

「よし！ 騐技大会に出る！」

「決めるの早！」

だつて俺は見た目は美少女だけど中身はまだ男だもん！……まだ。

「レイさんつてもしかして……。」

「ん？ 何？ 何かな？」

「……レズ？」

アリアが冷たい目でこっちを見てくる。 つといつかこっちの世界にレズという言葉があるのかちょっと驚きだ。

「ん？ まさか～男の魅力がさっぱり分からないくてだけだけつしてレズではないよ～。」

ホモじやねえし。

「いや、それつてレズに近くないですか？」

「お嬢ちゃん……まさかレズだったのかい？」

「ウイナさんは黙つて。」

今大事な話してるんだ。

「いや、女の子は好きだよ？ けつしてレズじゃないよ？」

「矛盾してません？」

「いや？ 全然？ 性的な意味は決してないし……アリアは愛でたいっていうの？」

「愛でたいって……褒められてるんですか？」

「褒めてるよ～ 可愛いんだもんアリア。

「あ、ありあがとうござります。」

アリアが顔を染めている。「うんやっぱり可愛いなあ……ッハ！マジでレズになつてゐる氣がする。 相当やばい氣がするー……っあれ？俺は元男だし女の子を好きな方が普通なのか？……いや、でも今は女な訳だし……。

『レイとアリアが固まっちゃつた。』

「う～んお嬢ちゃん達は大変だな～ 何かと。」

第15話 冒険者登録と一人の受付嬢

「レイさん、レイさん大丈夫ですか？」

自分がレズがどうか考えてから約1分。アリアが先に思考が復帰したらしい。

「ん？ ワタシハレズダヨ。」

「レズかどうかは放つておいてどうするか決めましょ、うー。」

『『つ』』というかレズつて認めなかつた？』

とりあえず、レズかはどうか俺の中では女が好きだ！だからレズでいいやという結論で終わつた。

「レイさんは闘技大会に出るんですねよ？ 後ウイナさんはもう行つちゃいましたよ。」

「あ、ウイナさんに別れ言つてないね。」

「まあ、お礼を渡したからいいんじやないんですか。」

『『と』りあえず冒険者ギルドに登録しないと大会に出れないんでしょう？』』

「そうですね……どうします？」

「登録しちゃおうか。」

「決断早！」

「だつてしうがなじやん？ 登録しないと大会に出れない。大会に出ないと女王様に会えないんでしょ？ だつたら登録するしかないじやない。」

『『じゃあギルドに行くの？』』

「まあ、今することはそれだね。」

とりあえずすることも決まつたし今からギルドに……。

「ギルド……何処だろ?」

「魔導隊に聞けば良いんじゃ無いんですか?」

「そ、そうだね。」

アリアさん流石ツス……。

首都ハイルズはループの町とは比べものにならないほど大きい町だ。町の中心には大きな木が一本生えており、そこから大きな路地があり、蜘蛛の巣状になっていた。

「ねえ、あの木ってユグドラシル?」

「レイさん、一般常識はないのにユグドラシルは知ってるんですか?」

「一般常識はないって……。」

流石に失礼だよアリア……。さてあの大きな木……首都の真ん中にある大きな木……ユグドラシルというのだがあれは「マジック・テイル」にもあつた。確かにエルフの種族専用の武器を買えたり、エルフの種族専用の魔法などを教えてもらえる。エルフの隠れ里にあつた木だ。そこはエルフの種族しか入れない里だった。俺は「マジック・テイル」の時に何回も来た記憶がある。それ以外にも火山の麓にドワーフしか入れない集落があつたり、見た目が明らかに悪魔な感じの種族である魔族のみが入れる城なんていうのもあつた筈だ。

「いや、ちょっと昔ね。」

「昔？」

「そう、昔。」

「……まあ、言いたくないのならいいのですけど。」

「言いたくないこともあるのだよ。」

『あ、あれがギルドじゃない?』

アリアと会話していると、田の前には真っ白な一階建ての木造の建物があった。看板には英語っぽい字でギルドと書かれている。今更だがこの世界の文字は英語にそっくりだ。ちょっと癖のある英語のような形のため大体の言葉は読めた。

「ギルドっぽいね。」

「良く思つたら狼の集いの人達も大会に出るためだつたんですかね?」

『さあ?』

「とりあえず私に勝負を挑んだんだから自業自得だね。」

「いや、一応お父さんの依頼ですけどね。」

「知らないよ~。私に勝負を挑んできたのには変わらないもの。』

わたしと勝負なんて60年早いわ!

とりあえず一人と一匹でギルドの中に入る。ギルドの中はカウンターのような場所がありそこにはかわいいドレスを着た女性が三人並んでいる。それ以外にもテーブルと椅子が置かれており、椅子に座りながら酒のような物を飲んでいる人が何人か居た。その、座っている人達が皆俺たちを見ている。俺は無視してカウンターに立っている女性の中で一番巨乳な人を選んで話しかける。

「すみません。」

「あ、はいなんでしょう?」

カウンターの女性はのんびりとした口調で俺に呼びかけてくる。

「ここで冒険者として登録したいんですけど……大丈夫ですか?」「はい、15歳以上なら誰でも登録できますよ。」

この女性（多分受付嬢）は15歳以上ならいいらしいが。

「何か、確認とかしないんですか?」

「ここに来たのだから15歳以上でしょ? それにあなたはエルフですから確認しなくても大丈夫ですよ……きっと。」「きっと!?

アリアが驚いた声を上げた。そして、その受付嬢に対して隣のカウンターの女性が注意する。

「ちょっと、流石に一通り確認はしないと……いくらハイナ教でもそこら辺はしつかりしないと。」

「でも……。」

「でもじゃないの。冒険者は一步間違えば死んじゃうような大変な仕事よ。その仕事の依頼の管理を任せているの、実力に見合わない依頼はこなさせないようにななくちゃいけなかつたりするんだからしつかりと確認はしないと。」「はい。」

俺の前の受付嬢は隣のカウンターの人間に言われた後、少しあとしつつも俺たちに話しかけてきた。

「え～と……じゃあ銀髪のあなたが冒険者志願?」

「はい!」

「黒髪のあなたは?」

「連れです。」

「じゃあ、黒猫は志願者?」

『んな訳ないでしょ。』

「「「「えつ?」「」「」「」「」「」

何故かテーブルから見ていた人達も驚きの声を上げていた。盗み聞きしていたのか……。しばらく黙っていたが隣の受付嬢の人達が驚きつつも声を俺たちに掛ける。

「いや、まさか使い魔だったなんて……あなた達のペツトかと。」

『ペツトとは失礼な。』

「確かに失礼でしたね。　え～つと……ああ、これこれ。」
「何これ?」

受付嬢のお姉さんが何処からかA4サイズの紙を取り出してきてこっちに渡してきた。

「これは?」

「(J)の名前はね……何だつけ?」

「年齢検査紙ね。　名前はそのまんま何だからちやんと覚えなさいよ。」

「うう……『めんなさい。　えつと、これはこの紙の上に手を置いてしばらくすると紙の色が変わるの。　0歳から14歳は黄色、15歳から20歳は青色、21歳以上は赤色になるの。』

「じゃあ、手を置けば良いのね。」

「はい、その通りです。」

俺は、紙の上に手を乗せる。じつじて見ると俺の手はかなり真っ白だと再度認識させられる。

「うーん、そろそろいいかな？」

「意外と早いね、もつとかかるかと思ったよ。」

「昔は5分もかかかったのよ。こうじう所も技術が上がってるのよね～。」

隣の受付嬢の人気が感慨深そうに話す。確かに紙の上にずっと手を乗せておくのは面倒くさいな。

「色は……青色ですから大丈夫ですね。じゃあ、この紙に名前と得意な武器とかを書いてください。種族はエルフ種ですよね？」

「ん？ そうだよ、エルフ種だよ。」

エルフ種と聞かれたので合っている。俺はエルフではないがエルフ種ではある。俺は紙に「レイ」と書き、武器には悩みつつも弓と書いておいた。「マジック・テイル」の頃によく弓を使っていたから間違つてはいない。

「書き終わりましたよ。」

「はい、ではギルドカードを発行しますので30分程したらここに取りに来てください。」

「はい……あ！ そうだ！ 鬥技大会に出場したいんですけど、何処で大会登録できますか？」

俺の言葉を聞き、隣の受付嬢が少し不思議そうにしながら聞いてきた。

「もしかしてあなた……大会に出るためだけに登録するの？」

「はい！」

俺が答えると、周りで俺の様子を眺めていた人達が笑い出す。

「おいおい、マジかよ……。」

「あんな小娘と戦いたいな……。」

「たくさん観客の前でいじめるのか？ やめとけよ。」

なにやら周りがざわざわしている。やつぱつこの姿だと相手に
なめられることが多いな……。

「本気？ 騐技大会は優勝すれば金貨五枚つていう大金が手に入る
けど、下手すれば死んじゃうし、相手はエルフだけじゃない、ライ
ヴァン同盟やオルアナ王国からも冒険者は来るんだよ？」

「別に金貨五枚には興味ないよ。私は女王様に会いたいだけだし。」

「女王様？……ああ！ 確か女王様と会食も望めばできるんだっけ？
『いいよねえ……。』

「あなたはギルドカードをしつかり作りなさい！
す、すみません……。」

ギルドカードを作っている受付嬢の人がとなりの人に怒られてい
るが、俺は話を続けることにした。

「私は、女王様とお話ししたいの。」

「なるほどね……確かにエルフの冒険者にはそういう事考える人も
いるけどあなたみたいな若い子は初めてよ。」

「へえ～。」

「あーそれならギルドカードを作るついでに大会の登録もしておく
ね。」

「本当ですか！ ありがとうございます。」

「大会の登録は私がするわ。 あなたは、ギルドカードをちゃんと作りなさい。」

「はい。」

「そういえばお名前は？」

「ん？ 私？ 私はアルカ！」

「もう…… また手が止まっている！ 私はサラよろしく。」

「よろしくお願いします！」

おつとりとしたアルカさんと眞面目に仕事をしているサラさん。
二人は中々仲が良いようだ。

第16話 交友関係が広がるのは良いことです

「あ、ギルドカード出来ましたよ~。」

「本当！？もう出来たの！？」

「レイさん30分は喋り続けてますよ。」

アリアとアルカさん、サラさんと喋っていたら三つのまにか30分たつてしまつたようだ。

俺は転成する前から喋るのは好きだった。あの俳優が格好いいという話にはついて行けなかつたが、あのアニメはおもしろいとう話なら女子と1時間喋り続けるのは良くあることだ。

「はいこれ、最初はランクEからです。ランクEの依頼しか受けられないけどそこら辺は勘弁してねみんなスタートは一緒だから。」

「はい、ありがとうございます。」

「後、一ヶ月に一定量の依頼をこなさないとランクが下がたり、ギルドカードを没収されたりっていう制裁措置があるから気をつけしてください。」

「ふむふむ。」

つまりある程度依頼はこなさなくちゃいけないのか。女王様に会うためとはいえ面倒臭い……。俺がギルドカードを眺めているとアリアがアルカさんに尋ねる。

「最高ランクは何ランクなんですか？」

「アリアちゃん良いこと聞くね~。」

「まあ、冒険者にはなりませんけどね。」

「いつかなつたときのためにも教えとくね~。」

「なりませんって。」

「最低ランクはEでそこからD C B Aつてなつていて最高ランクはSなんだよ。」

「無視ですか。私の言葉は無視ですか。」

『アリア、ドンマイ。』

アリアが軽くスルーされたことに涙目になりつつも抗議しているのを黒猫さんが宥めている。黒猫さんとアリアも一人と仲良くなつたなあ……と俺はほのぼのと眺めている。

「話している所悪いけど、大会の申請も出来たよ。」

「本当！？」

「何でこんな所で嘘着かなくちゃいけないのよ。」

「あ、それもそうだね。」

「……あなたつてアルカとそつくりね。」

「そつ？」

サラさんがやや呆れつつも俺を見ている。まあ、アルカとは会話がよく合ひうけどアルカさんと俺はそつくりなのだろうか？ アルカさんはすぐに会話に意識がいつちやつて手作業がよく止まるようだ。

「私も、レイさんとアルカさんつてそつくりだと思います。」

「アリアちゃん……私たちつて気が合ってそうね。」

「サラさん……。」

「アリアちゃん……。」

『二人共何握手して見つめ合つてゐるの？』

アリアとサラさんは二人でなにやら意氣投合しているようだ。

「とりあえず大会のルールを説明するね。」

「はい。」

サラさんが別の受付嬢に呼ばれて裏に行ってしまったので会話をひとまず止めて大会の説明をしようとしつことになった。

「大会は一週間後、首都ハイルズにある大闘技場で行われます！」

「おお！」

「この大会はヴェルズ帝国以外の大連全土から冒険者が集まるのだけれども……今回は出場する人は少なめね。」

『何で？』

「何でも、オルアナ王国とヴェルズ帝国がまた戦争するつていう噂があるらしいね。」

「本当ですか！それ。」

「ええ、結構信憑性高いらしいよ。戦争があればオルアナ王国内のギルドで戦争に参加する依頼とかが出るの。そういう依頼は報酬金がとても高いから大会よりもそつちに参加しようつていう冒険者が多いらしいね。」

「それに対してハイナ教国は？」

「戦争には参戦しないらしいね。この国は今まであの二つの国の戦争には参加しなかつたから。あ、でも大金と交換にオルアナ王国に魔法を教えたりはしているけどね。」

「そこら辺は知つてた？ アリア。」

「まあ、常識と言つたら常識ですね。後はハイナ教国でしか作れない生地の服を輸出したりしてますよ。」

「その生地も魔法が無くちや口クに加工が出来なかつたりするからなんですけどね。」

やつぱりハイナ教国の収入源は全て魔法のようだ。 流石エルフの国。 魔法の文化が様々事に使われているようだ。

「話を戻すけど、明日で大会の参加の申請は締め切つて対戦相手をルーレットで決めるの。 それで決まった対戦表を5日後、首都ハイルズの至る所に張り出されるから見てね。」

「大会当日の集合時間とかつて決まってるの？」

「大会当日は午前9時に大闘技場の受付の人には話しかければとりあえず大丈夫です。 後、試合は一対一の真剣勝負で勝ち抜き戦だと思つてもらえればいいかな？」

「まあ、大体言いたいことは分かつたよ。」

『試合中に使つても良い道具とかは？ 使い魔とかはあり？』

「……黒猫さんやる気満々ですね。』

『そろそろ目立たないと。』

「なんか切実……。』

黒猫さん…… そんな事考えてたんだ。 意外と目立たがり屋？

「安心して黒猫ちゃん。 使い魔は直接なら一匹持つて行つても良いし、【召喚】を使うなら何体でも試合中に出していくんだよ、まあ出せる人はいないけどね。 あ、でもアイテムは使う武器と装備だけで回復アイテムとかは持つて行っちゃダメだよ。』

『じゃあレイ！』

「もちろん！ 黒猫さんと闘うに決まってるじゃん！」

『流石』主人様～！』

「なんか呼び方がランクアップした！？」

アリアも驚いているが俺も驚いている。 黒猫さんがこんなテンション上がるとは……。

「まあ、大体の事は言つたかな?」

「はい、ありがとうございます。アルカさん。」

「ま、仕事だしね。応援してるよ。レイちゃん。」

「はい!」

『久々に本気出す。』

「期待してるよ。黒猫さん。」

「二人とも応援していますからね。」

「アリアに応援されたらもう、やる氣出て魔法乱射しまくつたりやつ

からね!」

「それはやめてください。」

俺たちは話しながらギルドから出てハイルズの町を見学することにした。

視点変更 レイ ハイナ2世

「そろそろ闘技大会ですね。」

「はい、女王様。女王様には開会式に出席してもらい、試合の見学もしてもらいます。」

私はこの大会が好きだ。この大会の時には政治の事を考えず純粋に試合を楽しむことが出来る。オルアナ王国とヴェルズ帝国が開戦寸前だと言われているがいつも通りこの国は中立を表明するがこの国も警戒をきつくしなければいけなくなる。それでも大会は無事開かれることが決定した。

「この大会にハイエルフの方が出でくればいいのに。」

「そうですね……そしてその方が優勝してくれて会食と一緒に……とか考えてません?」

「あ、どうしてそのことを。」

「顔に出しますよ。」

そういえばここ最近はずっとおも知らないハイエルフの方の事ばかり考えている。これは本に書いてあった恋みたいだなあと少しロマンチックな事を考えて少しほほえむ。

「そういう事があればいいのに……。」

「あつたる奇跡ですよ。 女王様。」

「そうですね……。」

そういう奇跡を少しだけは私は期待しているのだった……まるで物語の王子様を待つ子供のよつこ。

第16・5話 ハイルズの夜 宿屋にて（前書き）

注意！ 今回の話は作者の頭のねじとかが無くなつたせいで内容がひどいです。ゲームのキャラクター、タイトルとかが出てくるのに嫌悪感を覚える人は見ない方が良いです。後、この話を見なくとも別に大丈夫です。

第16・5話 ハイルズの夜 宿屋にて

視点変更 ハイナ2世 アリア

いきなりだが、レイさんは寝てるとき寝言を言いつことがある。たいしたことではないのだが時々「キングクリムゾン！」だとか「ティロ・フィナーレ！」などといきなり叫ぶため時々びっくりしてしまうことがある。何かの呪文なのだろうか？今度レイさんにでも聞いてみよう。

私たちはハイナ教国首都ハイルズにやつてきて、レイさんがギルドで冒険者として登録をし大会の参加申請も終えた後、首都を観光した後、宿屋に来て食事を取った後風呂に入り、もう寝るところだ。レイさんは何故か私と風呂に入るときは顔を赤くして、私を見ないようにして入ってしまう。他の人と入るのがそんなに恥ずかしいのだろうか？

「じゃあ、もう寝ようか。アリア。」

「はい、おやすみなさいレイさん、黒猫さん。」

『おやすみ……。』

今日泊まっている部屋はダブルベッドの部屋であり、レイさんと黒猫さんが一緒に寝て私がもう一つのベッドに寝る事になった。

「いや……だから、一番は優雨だつてば……。」

ベットに入つてから大体2時間くらいがたつただろうがいきなり

レイさんが変な事を呟き始めた。コウ?誰かの名前だらうか?

「雅楽乃……あの子もいこけど一番は優爾だよ~。」

ウタノというまた別の人の名前が出てきたが一番いいのはコウといふ人らしい。そこからしばらく何も言わなくなつたが。レイさんがボソリと

「アリア……はあ、かわいいなあ。」

「へ?」

え? いきなり何で私が出てくるんですか? つこさつきまで別の人があ夢に出てたんじやないですか?

「ん? 誰だつて? ……ああ彰は知らないのか俺よりも年下だけど… 可愛い子なんだよお~。」

アキラつて誰ですか!? また新キャラ出てきましたよ! つていふか一人称が俺になつてるし……。

「どこいら辺がいこつてそりゃあ……やつぱり真面目な所かな~。俺の間違いをしつかり指摘してくれるし、可愛いしね。」

レイさんの寝言は聞かない方が良いかも知れない。恥ずかしくて死にそうです……私。ちなみにレイさんの寝言で起きた黒猫さんが私のベットに入つてきました。

「彰に勧められてやつた……おと クラだつけ? あれ中々面白いね、気に入ったよ。」

またよく分からぬ単語が出てくる。レイさんの寝言は多分誰かと会話をしているのだろう。サッパリ分からぬが。

「男子が女子校に通うなんて斬新な設定はびっくりしたよー。」

なんだかものすごくおかしい事を言つているような気がする。よく分からぬけど。

「俺だつたらこけるかもーへふさけるなよー彰ー。」

『アリア……寝れないからどうにかして。』

「(ま)んなさい……無理。」

黒猫さんが眠たそつこしながら私に訴えてきた。中々かわいい……。

『何なでなでしてゐのーやめてー離してー。』

「かわいい……はあ」

『うう……夜怖い……。』

「怖がつていてるのもかわいー……。」

黒猫さんをそのままなでてごると。黒猫さんが『【補助変身】』と呟いた瞬間黒猫さんが白く輝いたと思つたら灰色の髪の少女が目の前に現れた。

「もうー離してつてば。」

「えつ? 黒猫さん?」

確かにレイさんが「黒猫さんは変身して人になれるんだよー。」とか言つていたような気がする。つと黙つては目の前にいる美少女は黒猫さん!?

「黒猫さん……なの？」

「うん、 そうだよ？」
つていうかアリアちょっと大丈夫？ 頭打った

私の手から離れて心配そうな顔をしながら私の額に白い手を乗せてくる。それを見て私は。

「えっ？ つかせやあー。」

思わず抱きついた。

「わー！ ちょっと！ アリア！？」
「あー、ちょっと！ 後、一時間くらー！」

黒猫さんが悲鳴を上げる。 もう、 黒猫さんがかわいいからびつ
でもいいや……。

視点変更 アリア レイ

「何これ？」

朝起きて、アリアが寝ているベットに目を向けたがカオスな光景になつていて。裸の黒猫さんに抱きついているアリア……涎を出していてとても幸せそうな顔をしている。

「ご、ご主人様……助けてえ……。」

「な、何があつたの？」

「アリアが……抱きついてきた。」

「は……はあ。」

俺はアリアの意外な一面を見た気がした。

第17話 初めての依頼（前書き）

今回の話はちょっと自分で書いてて意味不明になつたところがいくつかあるので分かりづらい所があると思います……すみません。

第17話 初めての依頼

「……」
「……」
『……』

宿屋の部屋にいるのだがなんか空気が重い……主にアリアの周りが。

朝起きてからアリアがずっと黙っている。俺がボケてもほつぺたをペチペチたたいても全く反応しない。時々黒猫さんを見て顔を赤くして顔を伏せてしまう。いや、これはまさか……。

「アリア、もしかして黒猫さんの事が……。」

「……？」
「……好きなの？」
「は？」

多分そつに違いない、高校ではさんざん女子から恋愛相談を受けていた俺だから分かる。きっと夜に黒猫さんに抱きついたのはそれが理由だろう。

「い、いやレイさん？」
「分かつてる、分かつてる私の事は気にせずじりじり。」「どうぞって何を！？ 違いますからー」「もしかしてアリア……。」「違いますってば！」

アリアの突っ込みが宿に響くのであった。

「ふむふむ……じゃあ、アリアは黒猫さんがついついかわいくって欲望にかられて抱きついちゃつたと。」

とりあえずアリアの言い分を黒猫さんと一緒に聞いていた。アリアの理由はしつかりしていると思う（俺の中）。

「……不本意ですが事実です。」

「まあ、黒猫さんの変身した姿はかわいいっていうのには同意するよ。」

「同意するんですか……。」

だつて黒猫さんのあの姿はかわいすぎるよね。うん、分かる分かる。

『そもそも』主人様の寝言がつるさいのが原因。』

「え？ 何か言ってたの？」

「色々と言つてましたよ。 アキラとか何とか。」

「……へ、へえー。」

アキラ……ああ、彰か。ひいらぎあきら 彰俺が高校生だった頃の数少ない男友達だ。俺が「マジック・テイル」を始める理由を作った人

でもあるから俺の中ではそこそこ重要？な人なのかもしれない。確かに夢に出てきたような気がしなくもない。彰も「マジック・テイル」をしており確かネコミミが特徴的な獣人族で盗賊だった。

「昔の友達ですか？」

「まあ、そんなもんだね。 少ない男友達の一人だったね。」

『「主人様つて友達いたんだ……。』

なんて失礼な事を言つんだこの使い魔は。

「…………どう思つたのかちょっと聞きたいんだけど?」「
『だつて常識知らずだしちゃ……。』

「確かに森の中で引き籠もり生活してたんじゃないでしたっけ?
「うぐつ…………ま、まあそうだけど。友達くらいはいたよ。」

自分で決めた設定の事をすっかり忘れていたのは内緒である。

宿屋を出て、ギルドに一人と一匹で辿り着いた。ギルドの中にあ
る木製の掲示板があり、そこに依頼の書かれた紙がたくさん貼られ
ている。そこらへんは「マジック・テイル」の頃と変わらないよ
うだ。俺は、掲示板の依頼を眺める……ポーションの納品やライ
ヴァン同盟までの護衛等の依頼がありその紙一つ一つに判子でE-
Sのうちのどれかが押されている。

「色々あるね。」「
「依頼受けるんですか?」「
「まあ、大会まで暇だしね。」

何をしよう……、ゴブリンの討伐Eランク……犬を探してください
Eランク……Eランクでも色々あるな。俺は、掲示板の中の依頼
の中から一枚依頼を選び、掲示板からはがす。

「よし、これにしよう。」

「……えーっと決闘の助太刀求む?」

「また決闘絡みですか?」

「……だつて楽そうだしそれに今日まで『らじ』からね。」

「意味わかりません。」

『『というか何で決闘がEランクなの? もつと高いと思つたのに。』』

「理由教えてあげようか?」

ん? 後ろから何か声が聞こえてきたので後ろを振り向く。振り向いた所には真面目な受付嬢のサラさんが立っていた。

「あ、おはよ~! やいります。」

「おはよ~。」

「おはよ。そして依頼を受けるの?」

「はい! 大会まで暇なので。」

『『で、何でこの依頼のランクが低いの?』』

ふむ……黒猫さんが聞きたいことを聞いてくれた。 決闘なんて中々やばそうな雰囲気のする依頼なのに何故Eランクなのか俺も聞きたかった。

「そりゃあ……決闘なんて言つたつてせいぜい人対人じゃない。人対モンスターの方が遙かに危険だから決闘は高くてロランクくらいにしかならないのよ。」

「なるほど……。」「まあ、それでも決闘の中には凄い冒険者と闘つ事になつたりするから危険かと言われたら危険ね。」

「ふうん……じゃあ、受けれるよ。」

「了解。これは今日までの依頼だからね。 とりあえず依頼者がユグドラシルの木の近くの広場で10時に待つているらしいからそこに行つてね。」

「うん、ありがとう！ サラさん。」

「どういたしまして。」

『ナニいえば、依頼がちゃんと出来たかとかはビリヤツて分かるの

？』

あ、そつこねば聞いておきたいな。 「マジック・テイル」の頃
はやればすぐに依頼が完了したからソレ辺分からないな。

「ああ、依頼者に依頼完了書つてこいつを渡してあるから、そこそこ
依頼が出来たつてこいつを証明してもらつてから受付嬢に渡して
ね。」

「はい、サラさん何から何までありがとうございます。」

「いやいや、アリアちゃん。 受付嬢ですから冒険者達に聞かれた
ことは何でも答えなきゃね。」

『なんというプロ根性……。』

「……常識じやないですか？」

黒猫さんが変な所で関心しているのとアリアが微妙に呟く。

「レイさん……そろそろ一〇時じゃないですか？」

「えつ……ホント？」

『9時45分。』

「後、15分ね。」

「い、行くよ！ アリアー！ 黒猫さんー！」

「え、ちょっと！ 待つてくださいー！」

『ご主人様つて足速いよね。』

とりあえず俺たちは急いでユグドラシルの近くの広場に向かった。

走り続けて広場らしき所に辿り着く。黒猫さんはもう来たようだ。アリアはまだ来てないようだ。広場には仲よさそうなエルフの夫婦と赤ちゃんがいる……とは言つてもどちらも20歳くらいにしか見えない。エルフの見た目は20歳まではヒューマンと同じように成長し、それから成長が殆ど止まってしまうらしい。ちなみに俺が若いつて言われるのが見た目がエルフから見ても17歳くらいだからそうだ。

俺は広場を見渡して依頼人らしき人を探す。決闘なんて言つたつてそこら辺の男どうしの喧嘩程度だろうと俺は思っていたので若そうな男を探す。

「レイさん……速すぎます……。」

『アリア遅い。』

「黒猫さんは猫だからね~。」

息を切らしてやつてきたアリアが合流してきたので搜索を再開する。今いるのはエルフの夫婦と赤ちゃん、それとやや豪華なドレスを着たエルフの女性とヒューマンの執事らしき人……ヒューマン?

「ねえ……アリア。」

「は、はい? 何ですか?」

アリアがまだ息を切らしているがちゃんと聞き返してくれた流石アリア。

「ハイナ教国のお金持ちの家には執事とかつているの?」「まあ……執事とかはいますけど……大体がエルフですね。ハイ

ナ教国ではエルフが一番信じられる種族っていう状態ですか？」

ヒューマンは珍しいですね。」

「よし！聞きに行こう！」

「何を！？」

「あなたが依頼主ですかって聞くんだよ。 こういうときは異常な姿をしている人は大体異常な悩みを持っているものさ。」

『分かったような……分からぬような。』

黒猫さんが戸惑っているが俺はあえて無視して豪華なドレスのエルフに話しかけに聞く事にした。

第1-8話 またまた決闘

俺はダッシュでドレスを着ているエルフに話しかけに行つたのだが……。

「お嬢様！危険です！」

「え？」

ヒューマンの執事がいきなり前に出てきてドレスを着たエルフの人のちょっと間の抜けた声が発せられた。

「え？ 何？ 私危険なの？」

「当たり前だ！ いきなりお嬢様に走ってきて……アントシア卿に雇われたのだな？」

「は？ アントシア卿？」

「とぼけても無駄だ！」

いきなりヒューマンの執事が意味不明な発言をしてきたと思ったらいきなり殴りかかってきた女の子に殴りかかってくるとかおかしくね？ こつちはかよわい（見た目は）エルフの美少女（自称）だぜ？

「そりゃー！」

「な、何！？」

だがエルフマスターは伊達じゃない！ 執事の腕をうまくつかみ一気に上手投げをする……こんな技「マジック・テイル」には無かつたがレベル500というステータスのおかげで相手が男だろうと難なく空手の技が出来た。

「クツ……！」

「……とりあえず、話を聞いてくれますか？」

「アントシア卿に雇われた者に聞くことなどない！」

「……とりあえず話を聞きました？ アントシア卿の使いとは思えません。」

「ですがお嬢様！」

『なになに？ 何が起こったの？』

「さあ……？」

俺に追いついてきたアリアと黒猫が今の状況に首を傾げていた。

状況説明後

「すみません……まさか冒険者ギルドで依頼を受けてくれたとは……。」

「申し訳ございません私の執事が不届き者で……。」

数分後……とりあえず一人から話を聞いた所、大体の状況は掴めた。目の前に居る執事曰くエルフのお嬢様はとりあえずオルアナ王国の貴族で執事はお嬢様に仕えているらしい。そしてエルフのお嬢様にお見合いの話が出たのだがはつきり言つと相手があまりいい男じゃなかつたらしい。お嬢様曰く「自分の父親の自慢ばかりして何にも出来ない坊ちゃん」でお嬢様は遠慮したのだが、その男がしつこく訪問してくるのでエルフが中心の国……ハイナ教国に逃げてきたのだが、ここにもやつてきたので追い払う為に決闘を申し込んだらしい。

お嬢様の方が勝つたら一度と関わらないこと、男の方が勝つたら婚約の話をお嬢様が受諾すること。それで決闘をしてくれる

人を探していたのだが今まで誰も依頼を受けてくれなかつたので
しうが無いから執事に出てもらおうかと思つて いたらしい。

「ふむふむ……じゃあ私が出れば問題無しだね！」

「本當ですか！？」

「まあ、私をいとも簡単に倒したのですから実力はありますね。」

なんだこの執事偉そだな。

「まあ、みなさんどりあえずここで待つていれば決闘の相手は来ますのでしばらく一緒に待ちましょうか。」

「はい。」

「レイさん！ もうちょっと氣を引き締めとかないと…………。」

『大丈夫でしょ？ ご主人様だし…………。』

とそのままお嬢様なエルフとしばらく喋りながら待つことになつた。

「ふむふむ……つまり今のオルアナ王国は腐つてゐるといつのかね？」

「その通りです！ いつもいつもヴェルズ帝国と戦争ばかり！ もつとハイナ教国やライヴァン同盟と親睦を深めるべきです！」

『何でこんな会話になつた…………。』

「……お嬢様は今の王国に不満があるのでうなで。」

喋ること約5分最初はお菓子がおいしいといつ話をお嬢様の方から喋ってきていたのだがしばらくしてから急に政治の話になり、お父様のあそこがだらしない、ここがダメだという話にいきなり変わつていた気づいたらオルアナ王国の不満を彼女はぶちまけていた。本当にどうしてこうなった……。

「ちょっと？ 聞いていますか？」

「あ、うん。 聞いてるよ？」

「まず、今の国王になつた途端のヴェルズ帝国の批判から、貴族は所詮己の駒という発言から……自分の支持率が低いという事に気づいているのかしらあの王は。」

「あ、うん、どうだろうね~。」

はつきり言つて分け分からない。 分かつたのは今の国王がろくでもないっていう事ぐらいしかない。

この話をどう聞き流そうか考えていると、目の前に場所に不釣り合いな鎧を着たドワーフらしき毛むくじやらの男と派手な青い服を着たヒューマンの男、そして燕尾服を着たヒューマンのじいさんが広場に現れた。

「げつ……アントシア卿。」

「あの人ですか？」「

「ええ、お嬢様に何度も求婚をしてくる。 ストーカーまがいの坊ちゃんです。」

『明らかにナルシストだね……間違いない。』

「黒猫さん……そういう事は黙つとかないと。」

「アリアもそう思つてるんだ。」

アリア意外とひどいこと考えてるんだな~と内心思つてるとあ

ちらの集団が気づいたのか、たちに歩いてくるのだが派手な服着た男の歩き方がかなり自身満々だ。歩き方でその人の性格が分かるつていうのは本当のようだ。

「御機嫌ようアントシア卿。ちゃんと約束は守ってくれますか？」

「もちろんだよ、ちゃんとそっちも約束は守ってくれよ？ それにしてもそちらは誰が決闘をするのかな？ そちらの体の細い執事さんかな？」

アントシア卿の言葉を聞き、後ろのドワーフの男が豪快に笑う。逆に執事の方はやや苦い顔をする。あのドワーフに俺が勝てないとでも思ったのだらつか？

「いえ、私です。私の相手はそちらのドワーフの方ですか？」

「おう！ アントシア卿に依頼された！ お嬢さんだからと言つて手加減はしないぞ？」

「じゅらじゅら。本気でいきますよ？」

俺たちのにらみ合いを見ていたアントシア卿がやれやれといった風に俺とお嬢様を見てくる。

「おじおじ、まさかこのウルフの少女が決闘の相手かい？ 言つておくけど、こちのはAランクの冒険者で一人でウルフを狩った事もあるぞ？ 本当に大丈夫か？」

「ウルフってレベル20くらいしかないじゃないじゃない。問題無いわ。」

アントシア卿をにらみ返しつつも反論をするがアントシア卿はただの空元氣だと思っているようだった。

さて広場で勝手に決闘なんてしていいのかと思つたがどうやら決闘することはあらかじめ報告してあるようだ。周りには魔導隊の人達が結界を張つてしたり、審判をしたりするようだ。他にも野次馬が集まつてきている。野次馬の中にはエルフの民間人らしき人もいれば、冒険者のような服装の人もいる。

「ルールを確認します！ 降伏、もしくは気絶したほうが負け！さらに戦闘不可能と魔導隊の人に判断されても負け！ それでいいですね？」

「おう！ それでいいぞお嬢さん！」

俺のルール確認に対して相手のドワーフが返事を返す。俺はヴァイオリンを構える。魔導隊の人が結界を張つていて外には衝撃が来ないらしいが俺が本気出せば壊せそうで怖いので加減ができる精霊術士の装備で行く。

「では両者共準備はいいですね？」

「おう！」

「はい！」

「では、開始！」

魔導隊の審判の合図から決闘の火ぶたは落とされた。

視点変更 レイ アリア

結界の外からレイさんを見る。レイさんの装備は前の決闘の時と変わらず白いワンピースにヴァイオリン、そしてヒール付きのパンプスを履いている。周りの野次馬にはあきらかにレイさんに闘う気があるのか？という目を向けている者もいる。

「ねえ……本当に勝つ氣があるのかしら?」

「さあ……。」

依頼者の一人は心配そうにレイさんを眺めている。まあ、闘うのに武器がヴァイオリンなら当然の反応だろ?。

「レイさんなら大丈夫じゃないですか?」

「それは言いましても……。」

「では、開始!」

まだお嬢様は心配そうにしているが、決闘の合図が起きた。

レイさんに相手の冒険者が一気に近づく。相手の冒険者は大きな体に斧といふかにもな姿だ。レイさんは素早く弦を動かし、ヴァイオリンを弾き始める。

「あの人は本当にやる気があるのか?」

周りから馬鹿にする声が聞こえるが、レイさんは聞く耳を持たずには弾き続ける。意外とちゃんと曲を弾いていて周りの野次馬には「良い曲だ……。」などと呴いている人もいるが相手の男が斧を振り上げたのを見て私は思わず叫んだ。

「レイさん!」

「問題無い!」

あ、ちゃんと返事してくれた。……それはそうと相手の男が斧を振り下ろすギリギリの所でステップを踏みながらかわす、その時も曲のテンポが全く変わらない。その後すぐに相手の鎧に蹴りを入れたのだが、蹴った瞬間に相手の鎧にヒビが入り相手は吹っ飛び

結界にぶつかる……レイさん高性能すぎない？しかもワンピースだからパンツが見えかけましたよレイさん。

「グッ！？」

「モンスターの突進をくらつたみたいだ！」

結界を張っている魔導隊の人達が苦悶の声を上げる。レイさんの蹴りでモンスターくらいつて何者ですかレイさんは！？そして蹴ったレイさん本人は周りに白い球体がいくつか集まりながら一言発する。

「ああ、行くよー。」

その言葉と同時に白い球体からビームがいくつか飛ぶ。前の決闘の時にも使った技だ相手の男は苦しみつつも急いでよけるが白い球体がいきなり爆発し、男がさらに吹っ飛ぶ。

「あれはまさか……精霊から力を借りて【魔法】を使っているのか！？」

野次馬のエルフがボソリと呟く。そういうえば前の決闘の後にそんな事言っていたような気がしなくもない。周りがざわめく中、レイさんが男に対して聞く。

「降伏してくれれば、もう痛い目に遭わないで済むけど？」

「ふざけんなよ！ お嬢さん！ 僕をなめるなあああー！」

男が叫びながらまさしく、最後の力でレイさんに突っ込むがレイさんはため息をつきながら一言。

「そ、体がどうなつても知らないわよ？【魔法 フェアリー ボム】」

「

レイさんが言つた途端、レイさんの周りの白い球体が全部一気に輝き爆発する。

「うわあ！」

「結界が壊れたぞ！」

「目があ！ 目がああ！」

「別に失明はしないだろ？ から早く確認をしりー。」

魔導隊の人気が混乱している中、レイさんの鈴のよつな声が一つ。

「あの～。 相手の方が気絶したので勝ちで良いですよね？」

爆発による煙の中汚れ一つないワンピースを着たレイさんが優雅に立っていた。

第1-9話 様々な雑談（前書き）

レオーナ……久々に出たのに……この扱い

第1-9話 様々な雑談

視点変更 アリア レイ

「派手にやつたらしいね。 尊はもう流れてるよ。 魔導隊の結界をぶつ壊したエルフがいるって。」

決闘の後、俺はギルドに依頼完了を報告しにきていた。 結界を壊した後はエルフの学者らしき人にどんな魔法か聞かれたり。 アントシア卿が駄々をこねたので魔法を撃ちそうになつたりと色々あつた。

「いやー、アルカさんあれはたまたまですって。」

「たまたまだろ？と魔法は凄かつたらしいじゃない。 今じゃ精霊とは話せても精霊と一緒に闘うなんでもう出来ないよ。」

「な、何故精霊だと分かった！？」

「魔導隊の人人が何人か結界を張っている時に精霊の声が聞こえたらいいよ。 つていうかその反応だと本当なんだ。」

アルカさんめ中々の策士だな……。 俺がどう答えるか悩んでいると隣の受付からサラさんが話に割つて入ってきた。

「こりつー！ アルカ！ 言いたくないことを言わせよつとしない！」「えーサラ気にならないの？」

「そんな事より早く報酬金を出す！ もう確認は終わつたでしょー！」「はーい、えーっと報酬金は銅貨3枚だね。 今回の依頼によるワソクの昇格は無しつと。」

アルカさんが銅貨を手渡していく……こんな雑な管理で良いのか

? つと後でサラさんに聞いたところ「アルカだから。」と苦笑いで返事された。

「あ、そうそう後闘技大会で何回戦えれば良いか分かったよ。」

「一対一の勝ち抜き戦だっけ?」

「そう、全部で7回戦。いつもなら10回戦くらいにするんだけどね。」

「つとこう事は優勝しやすいという事ですねー。」

「でも、Aランクの人があるらしいよ。それ以外はあなたを除くと全員Bランク。」

『ご主人様だけEランクだね。』

「あと使い魔持ちもあなたを除いて3人くらい出るよ。」

「ほほう。」

「アルカ、喋りすぎ。」

「はい。」

サラさんに咎められたが、闘技大会について中々いい情報をもらった。情報は戦いのなんぢやうと誰かが言っていたような気がする。

「ありがとう! アルカさん! じゃあねー!」

「どういたしまして。アリアちゃんと黒猫ちゃんもよくなっ。」

「はー! また!」

『さよなら~。』

アルカさんに別れを告げギルドを出る。さてこの後は何をしよう?

視点変更 レイ レオーナ

「第1、2騎士隊はそのまま進め！ 第1魔法騎士隊は遠距離魔法の準備！」

オルアナ王国から見て北に広がる高原、ここがヴァルズ帝国との長年の戦争で最も戦場になつた場所だ。東に広がる平原を渡ろうにも平原の主がいる影響で部隊に被害が出る確率が高いので滅多に平原を使う作戦は滅多に出ない（数回あつたが）ので平原を中心に見張ることにした。

平原を見張ること数日、ついにヴェルズ帝国の独特な黒い軍服が見えてきた。オルアナ王国の鎧とは対になる黒い鎧を着け、フードをかぶり頭蓋骨のような仮面を身につけているまるで死に神のような服が500……いや1000人近く一気に馬に乗つて走つてくる。

「遂に来ましたね……。」

「ああ……。」

隣に居る若い騎士が声をこわばらせる。任務は数回しかしたことも無いのにいきなりの殺し合いだ無理も無い。

「敵と衝突！ 戰闘に入ります！」

「よし！ そのまま戦闘に入れ！ 私も出るー！」

「団長自らですか！」

「当たり前だ！ 組織の上に立つ者が前に行かなれば誰が着いてくるー！」

私は、レイピアを鞘に入れ馬に乗り叫ぶ。

「第3、4、5騎士隊は私に続け！ 第7魔法騎士隊以外の魔法騎士隊はできる限り魔法を撃て！」

「「「「」」解！」」「」「」「」

さあーこの戦争に勝ち、仲間と共に生き残るぞ！

視点変更 レオーナ 彰

「よし、今日はここまで！ 号令！」

「起立！ 礼！」

今日も、授業が終わつた。俺はいつものようにバックには何も入れず高校から出る。出てからしばらく歩いた所で後ろから声がかかる。

「お～い、彰！ 一緒に帰る？ ゼー！」

「……聴か。」

「相変わらず暗いな～。……やつぱり陸の事か？」

「……ひるとい。」

大谷 聰高校に入つてからの友達だ。こいつの良いところはいつも明るいところだ。今はその明るさに安心する反面うざつたくも思つ。

「……まあ、あの真面目でかわいくて男子から人気がある陸姫がいきなり何日も行方不明だもんな。」

「あいつが聞いたら絶対泣くな。」

「だな」

陸姫 この高校じゃ有名な名だ。この平凡な私立高校で好きな女子ランキングで1位、2位をいつも争う白崎 陸の通り名だ。一応男だが。俺が一年の頃、好きな女子ランキングで一位を獲つたというある意味騒然とした出来事が一年のときがあり、この名が付いた。

「正直あいつがいなくちゃ俺のクラスの空気がかなり暗くなつて困る。」

「女子からも人気だもんな。」

「あいつに告つたらレズ扱いされるけどな。」

あいつは美少女にしか見えない。最近筋トレを始めたとか言っていただがどつからどう見ても健康志向の女子にしか見れなかつた。……そういえば一年の頃からファンクラブが出来てたな。

「……なんだかんだ言つて、あいつがずっとこの学年の中心だつたな。」

「……ああ。」

あいつにそんな事いつたら色々と怒つたりしてくるだらうけど、この学校の中心と言つても良いくらいの人間だつた。心は広く、優しく、いつも他人の為しか考えていない……俺からしてみれば人生に絶対損するタイプの人間。それでもあいつは……

「理想的な人間だな。」

「…… そりが？ あんな苦労しかしなさそりな性格は」「めんだな。」

「お前、殴るよ？」

「え？ ちよー？ マジやめて！ ？ グーはダメー。お前のパンチはマジで痛いんだって！ ？」

駅に続く通学路で一つの悲鳴がこだました。

第20話 アリアの教会探訪

視点変更 彰 アリア

「レイさん……ダラダラしそぎじゃないですか?」「でもする」とがな「じゃない」。

決闘の次の日、レイさんがだらけきていた。もつまごくらいに。

「任務とかはどうですか?」

「えへ、任務の次の日だし休みたい」。

「……まあ、そうですか。」

レイさんの魔法は凄いしその反動なのだろうか?とも思ったが単純に面倒臭いだけのようだ。

「アリアー、今日は自由行動にしよう。」

「ま、まあそうしましょつか。私は教会に見学に行きたいので。」

『うん、じゃあね。』

「あ、アリアーこれ。」

私が教会に行こうと準備をしていたところレイさんから何か白い石が手渡される。

「何ですか? これ。」

「精霊石だよ~もしもの事があつたら守ってくれるんだよ~。」「何で曖昧な……。」

まあ、レイさんが言うのだから能力は確かなのだろう。 とりあえず魔導院の制服の胸ポケットにします。

「じゃあ、行ってきます。」

「いってらっしゃーい。」

私は、レイさんに見送られながら。 宿屋から出た。

とりあえず私は、ユグドラシルの方に向かつ。 首都ハイルズには教会が一つ、ユグドラシルの近くにある。 その教会ではハイナ教関係の大きな行事は殆どそこでやるらしい。 ちなみに女王様はその教会の隣にある城で暮らしている。 首都ハイルズはユグドラシルに近づくほど冒険者向けの店は減つてどっちかと言えば実用品やハイナ教関連の物を売っている店が多い。 私は、商品を眺めつつも街道を進む。

「うへん……。」

久々に一人になつたので氣づかなかつたが私は目立つているようだ。 ずっとだが私の服は魔導院の制服、周りの人達の服とは雰囲気が違う。 私は今更だが周りとは違うことに恥ずかしさを感じた。

「い、今更そんな事考へてもしょうがないです！」

私は、自分の考へを頭から消す為にやや小走り氣味に教会に向かうのであった。

「……うわー。」

小走りで移動すること約5分、コグドラシルの木の根元に莊厳な建物が一つあった。窓のほとんどがスタンンドグラスで出来ている。どうやらこれが教会のようだ。その隣にもまた大きな真っ白い建物……女王様の城があつた。表現が直球だがどちらも絵本に出てきそうな建物……かなり子供っぽいがこういう表現しかできなかつた。

私は、とりあえず教会の中の庭に入る。教会には人が少ないが何人か居る。庭の中ではシスター服の女性が掃除などをしていたがこちらに気付きトタトタと歩いてきた。

「巡礼者の方ですか？」

「ん？ ああ、そんな感じですかね。」

間違つては無いだろ？……うん。

「迷惑でなければ案内して差し上げましょうか？」

「いいんですか？」

「ええ、こちらも今日の仕事はもう終わりそうですから。」「じゃあ、お願ひします。」

私は、彼女の厚意に甘えて一緒に見学することにした。

「まず、はじめに本堂がここですね。」

「……うわあ。」

シスターに連れられ本堂に入る。本堂はスタンンドグラスから入

る光によつてとても美しく輝いているように感じられる。

「」に人が集まるのは降臨祭とお祈りくらいしかないですけど、巡礼者も多いですから一番入念に掃除するところですね。」

「……軽い裏事情が漏れていますよ。」

「」は広いですから掃除も大変なんですよ。」

降臨祭、ハイナ教が出来る前から余った神話に出てくる唯一の神「ヤルトス」が世界を創り神の住む世界に帰ったという伝説がある。その後に一度だけ「ヤルトス」が地上に降りてきた事があると言い伝えられてきた。その日を祝うのが降臨祭だ。私の村でも村総出でやつていたが、多分その比にはならないのだろう。私が、ボンヤリと眺めているとシスターが私に話しかけてくる。

「後、こつちにヤルトス神とハイナ1世女王様の石像があるけど見に行く？」

「あ、はい！ 行きます！」

「」のとき、私はほとんどの事に驚きつつシスターに着いていくのであつた。

「そついえば、あなたの服見たこと無いわね、何処で売つているの？」

シスターが私に何気なく聞いてくる。

「」の服ですか？…………」の服は私の友人…………といつか仲間？から今借りているんです。」

「仲間？ あなた冒険者なの？」

「いえ、私はその友人について行つてゐるだけですでの冒険者じゃ

ないです。」

「……いつ言い方すると自分が少し邪魔なんじや無いかとも思つてしまつ。

「友達は大事よね。」

「はい。」

「ハイナ教でも、「友を絶対に裏切るな」っていう教えもあるしね、知つてるとと思うけど。」

「常識です。そして「友に絶対に裏切らせるな」という教えもありますからね。」

友が裏切るような行為をするな、そうすれば友は絶対に裏切らな
いっていう一言をハイナ1世女王様が発したことから生まれた言葉
らしい。

「そういうえばそろそろ闘技大会ね。」

「そうですね。」

「あなたの友達は出るの？」

「出ますよ。Eランクですけど。」

「……それ大丈夫なの？」

「本人が大丈夫だとつてますから大丈夫ですよ……きっと。」

「心配ね……あつ着いたわよ。」

「何処ですか？　ああ！ほんとだ！」

こうして私は教会中を案内してもらつたのであった。

「少し時間がかかりましたね。」

教会から出たときには夕方になっていた。教会でシスターと話していたらいつのまにか……という感じで時間が過ぎていたのであつた。

「レイさん流石にもう大丈夫……だよね？」

レイさんならまだだらけきつていそうで困るがそれもまたいかにも……と思いつつも宿屋に向かつた。

「ん？」

宿屋が見えてきた所だった。宿屋の前に人影と猫の形の影が見える。白いワンピースに銀の髪、そして真っ白な肌……レイさんと黒猫さんが宿屋の前に立つていた。

「あ、アリア～。おかえり～。」

『教会どうだつた？』

「レイさん……黒猫さん……どうしたんですか？ 宿屋の前に立て？」

レイさんに質問するとレイさんはやや笑いながら答える。

「いや～、ダラダラしたのはいいけど午後暇になつたんだよね～。」

『午後になつてもアリアが中々帰つてこないから待つてたの。』

「そつだつたんですねか。」

笑いながら答えるレイさんと猫の姿の黒猫さん……私は、この二人に絶対に裏切らないようにしたい。そして、絶対に裏切るよう

な事をやせたくないと思つた。

「じゃあ、もう宿屋に戻りましょ~。」

『うん。』

「夕食を食べよ~。」

「そうですね。」

……裏切るような事はないと想にますけれどね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6778x/>

物語の中の銀の髪

2011年12月27日21時02分発行